

第2 マスメディアの対応・責任

一 はじめに

現代社会におけるマスメディアの影響力からみて、ハンセン病に関して果たしたマスメディアの役割を検証することは、再発防止を考える上でも必要不可欠である。本件については先行研究がほとんど存しないことから、検証会議として独自調査を行い、これに基づいて分析するという方法を採用することにした。

問題は調査の対象をどうするかであるが、戦後の新聞報道、それも「らい予防法」が廃止された1996年までに限定した。違憲、不法なハンセン病政策が何故、戦後も廃止されず、逆に強化されたのか。そして、何故、法廃止が1996年まで遅れたのか。このような観点から、戦後のマスメディアの報道を検証してみたいと考えたからである。

しかし、一口に新聞報道といっても、わが国では、全国紙、ブロック紙、地方紙を含めて、多くの新聞が発行されており、全国紙の場合には、東京版の外に、大阪版や名古屋版や西部版等も発行されていて、このなかにも重要な情報が潜んでいる。ハンセン報道も膨大な量に及ぶ。しかも、大半の新聞記事はデータベース化されていない。これらのことから、本調査では、全国紙、それも東京版を調査対象の基本にし、大阪版や西部版も適宜参照することにした。

各療養所の動きや自治体、住民の動きなどについては、全国紙よりも地方紙の方が報道量も多く、詳しいといえるかもしれない。しかし、他方、報道がその時代のハンセン病に対する社会的な態度を反映するものであり、同時に社会的な態度の形成に影響を及ぼすものであると考えるなら、当時の日本社会がおおむねどのような態度でハンセン病およびハンセン病者をとらえていたのかということ全国紙の報道（場合によっては報道の不在）によって把握できるのではないかと考えられる。検証会議としては限られた時間内で調査を完了しなければならないことなどから、本調査では、後者の観点を優先することにし、療養所所在地の地方紙のうち収集ができたものについても、補充的に調査の対象に加えることにした。

二 検索の方法

縮刷版を通読しての検索によったが、全国紙のほか、療養所所在地の地方新聞社を含む各新聞社の調査部等の協力を得た。療養所自治会が保管する切り抜き帳をも参考にした。検索能力に限界があることからや、各社の調査部門による記事スクラップの保存状況等にも差異があることから、若干の調査漏れがあることをあらかじめお断りしておきたい。

三 時期区分

問題は、これらの記事をどのように時期区分するかであるが、さしあたり、次のように時期区分

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

した。

敗戦から1953年末まで

1954年から1960年末まで

1961年から1975年末まで

1976年から1990年末まで

1990年から1996年末まで

1953年を画期としたのは、全患協等による激しい予防法闘争にもかかわらず新予防法が国会を通過した年だからで、1960年を画期としたのは、2001年5月11日の熊本地裁判決でも遅くとも同年頃には違憲状態に陥っていたと指摘される時期に当たるからである。さらに1975年を画期としたのは、園内処遇の大幅改善とも相俟って、同年頃には予防法の強制隔離条項は有名無実の存在になっていたと指摘される時期に当たるからで、1990年を画期としたのは、予防法廃止の問題が顕在化し始める時期だからである。

四 検索の結果

敗戦から1996年末までのハンセン病関係記事リストの見出し一覧は、以下の通りである。見出しの後の（ ）内に、当該見出しがどの新聞社のものかに加えて、朝刊か夕刊か、また、当該見出しに何段が当てられているかいるかを記載した。当該記事の扱われ方を知る上で、貴重な情報と考えたからである。

1. 敗戦から1953年末まで

【全国紙】 本報告書添付「資料編」(CD版)参照。

【地方新聞 (東奥日報)】

1951年(昭和26年)

- 1月12日 ライ患者に益金贈る 英国映画 駐日代表のブ氏(夕刊3段)
- 1月26日 三笠宮、松丘保養園へ(朝刊ベタ)
- 1月27日 三笠宮 松丘保養園のへ 親しく患者を慰問激励(朝刊3段)
- 1月30日 一家九人心中 業病を苦しむ(朝刊ベタ)
- 2月 2日 書評 「回春病室」(光田健輔著)(朝刊ベタ)
- 2月23日 明鏡(投書) 療養所の窓から(青森松丘保養園入園者代表)(朝刊ベタ)
- 5月18日 皇太后崩御 ライ予防法に御献身 安部松丘保養園長語る(朝刊2段)
- 5月19日 思い出深い火災記念塔 松丘保養園に数々の御下賜金(朝刊2段・写真)
- 6月23日 県民も敬虔な黙祷 ありし日の御仁慈偲ぶ松丘保養園(朝刊2段)
- 8月21日 救らい事業基金委員会発表(朝刊ベタ)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 9月27日 貞明皇后記念 救らい募金運動 本県分は255万円(朝刊ヨコ1段)
- 10月26日 貞明皇后の御遺品 白磁の花瓶、松丘保養園へ(朝刊2段・写真)
- 11月 4日 救らい事業委誕生 募金目標二百五十万円(朝刊ベタ)
- 11月10日 社説 救ライ募金の達成を期待す
- 11月11日 松丘保養園職員が救ライ募金第一号(朝刊ベタ)
- 11月11日 ライ患者に日米合同バザー(夕刊2段・写真)
- 11月13日 衛生相談 ライ病の治療薬品は(朝刊ベタ)
- 12月 9日 現職の小学校教員にレブラ 一斉検診で判明(朝刊3段)
- 12月16日 振るわない救らい募金 目標の15%がようやく(朝刊2段)
- 12月19日 枕辺に故郷の匂い ライ病病む県人へリンゴの贈り物(囲み、ヨコ見出し)
1952年(昭和27年)
- 2月20日 天地人(朝刊コラム)
- 3月 5日 救らい基金七十余万円を横領 元救らい協会書記を逮捕(朝刊3段)
- 3月 6日 衛生部内汚職に発展? 保養園工事の不正(朝刊2段)
- 7月28日 九月日本で国際ライ研究会(朝刊ベタ)
- 9月14日 松丘に寄せる愛の灯 「保養園婦人の歌」発表の影に “光の園を築かん”
秋雨の中に感激の歌声(夕刊4段)
- 11月 5日 優しい作品ばかり 松丘保養園の文化展(朝刊1段ヨコ見出し・写真)
- 11月10日 神を肯定した作家 ノーベル賞のモーリヤック(朝刊囲み)
- 11月16日 松丘保養園で座談会 ライ予防法改正を望む患者 人間並みの扱いを暗黒
時代の再来を恐れる(夕刊4段・ハコ・絵)
1953年(昭和28年)
- 1月31日 宮城県庁で松丘保養園を慰問(朝刊ベタ)
- 6月 9日 松丘保養園に悪影響 左社県連で中止申し入れ 石江の爆破作業(朝刊2段)
- 6月19日 松丘保養園の救ライ法反対大会(朝刊2段)
- 6月20日 松丘保養園でスト 患者が「予防法案」反対で(朝刊2段)
- 7月10日 県議会記者席(朝刊囲み)
- 7月30日 保養園でハンスト 予防法の改悪反対叫んで(朝刊2段)
- 8月 1日 ライ患者20名県庁へ陳情行 “部長じゃ話にならぬ”(朝刊ベタ)
- 11月24日 酔って出刃で刺殺す 保養園の患者同士が(朝刊1段ヨコ見出し・写真)
- 11月25日 保養園殺人の容疑者を送検(朝刊ベタ)
- 11月26日 肺動脈が切断 保養園で殺された男の死因(夕刊ベタ)
- 11月27日 新容疑者を逮捕 保養園殺人事件 斉藤、人違い殺人と断定(朝刊3段)

2. 1954年から1960年末まで

【朝日新聞】

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

昭和29年

- 4月 9日 ライ非感染児童“龍田寮の子”は入学させぬ 同盟休校を決議 反対父兄で町民大会
熊本市黒髪校 解決まで休校継続・反対派のPTA総会で声明書 “心配はない”(厚生省、文部省の談話)(西部 5段)
- 4月10日 PTA論争よそに 教室で唱歌習う 非ライ児童交えて授業 (西部 3段)
- 4月10日 廊下で賛否の激論 非ライ児共学第一日の風景 出欠決める権限PTAにはない・黒髪校問題に市教委の見解 差別扱いは正しくない・市教委が声明書(熊本版 3段)
- 4月11日 登校学童も自習支度 非ライ児問題、六年生はこうみる うれしそうな子供たち・寮母さん語る(熊本版 3段)
- 4月13日 同盟休校派、自習場を開く 熊本非ライ児入学問題の対立深刻化す
神社など17カ所に 家庭教師も雇って 校長室に反対本部 “教委で適切な処置を文部省の方針 原則は通学さすべきだ” (西部 4段)
- 4月13日 フロ屋まで“第二校” 熊本非ライ児入学で同盟休校(大阪 2段)
- 4月13日 番台で父兄が監視 銭湯教室 黒髪小学校の「分教場」めぐり 各地から投書や電報 (熊本版 4段)
- 4月14日 非ライ児の健康診断 窮余の熊本市教委が提案 (西部 2段)
- 4月14日 黒髪校・二つの学習風景 足が痛い銭湯教室・反対派 大きな室にたった五人・賛成派 (熊本版 4段)
- 4月15日 PTA反対派に警告 熊本法務局 非ライ児童問題で(西部 4段)
- 4月15日 “学校は面白い” さわぎよそに無邪気な非ライ児 “伝染せぬ”根拠と安心感をまず徹底 非ライ児問題 他校のPTAはこうみる 校門にライの歌 反対派、自習つづく (熊本版 4段)
- 4月16日 こじれた非ライ児問題 仲裁案は練り直し 龍田寮側が再診を拒否 (熊本版 4段)
- 4月17日 改めて解決案練る 非ライ児問題、熊本市文教委が協議 “再診”仲裁案に賛否 自習場の出欠一応とらせる (熊本版 3段)
- 4月22日 きょうから臨時休校 熊本・黒髪校(大阪夕刊 1段)
- 4月23日 黒髪校の同盟休校解決(大阪 1段)
- 5月 7日 黒髪校きょう開校(大阪 1段)
- 5月17日 恵楓園患者ハNST(大阪 1段)
- 9月28日 この人に安住の地いずこ 冷たい故郷の眼 誤診から愛生園に十五年 (鳥取版 3段)
- 10月30日 ライ病に新ワクチン ニュージーランドの修道女が発見(読売2段)
- 11月7日号 “ライ”の誤診に泣いた二十年 愛生園に灰色の青春をおくった吉田青年 手記(『週刊サンケイ』2ページ。筆者は鳥取支局員)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1955年(昭和30年)

- 4月11日 入学式もお預け 熊本 非ライ児問題再燃(大阪夕刊 3段)
- 4月18日 解決、入学式行う 非ライ児でもめた黒髪校(大阪夕刊 1段)
- 5月29日 愛生園へホタル 守山町 全町あげて(大阪夕刊 2段)
- 5月30日 天皇陛下から映画 ライ患者御慰安に(夕刊 1段)
- 6月25日 論壇 ライの呼称をかえよう 予防週間によせて 宮城謙一(明大教授)(3段)
- 7月 5日 ライ患者、都内をブラブラ 詐欺で捕る(夕刊 1段)
- 8月25日 『人』 保健文化賞をもらう 井深八重子(固み欄)
- 9月16日 長島愛生園 高校開校式(大阪夕刊 1段)
- 12月 4日 ライ患者とともに 「小島の春」山形版・ある県庁職員の話 ヒザを交えて説得 患者の半数を入院さす(山形版 4段)

1956年(昭和31年)

- 4月11日 ライ患者のゆえに…… “不当の判決”と怒る 熊本県の殺人事件 各方面で問題視(4段)
- 同 一年以上も慎重に審理 当時の真庭判事の話(2段)
- 4月13日 “自白に任意性認めず” ライ患者公判・口頭弁論(夕刊 2段)
- 6月22日 未感染の青年らは訴える “救ライの日”を前に 打明ければ冷い目 温い理解がほしい(夕刊 横、3段相当)
- 5月16日 魂の叫び あすの太陽求めて ライ療養所の苦悩から(2段)
- 6月25日 『論壇』 遺伝の偏見なくせ 救ライの日によせて 林芳信(国立療養所多磨全生園長・厚生技官) (3段)
- 9月 5日 未感染のライ患者の子を救おう 第一回保育児童福祉協議会から 永遠の十字架が立ち上る施設の人たち (3段)
- 9月20日 『社告』 救ライ募金慈善音楽会 十月八日 日比谷公会堂で 近衛氏とABCが協演 ピアティゴルスキー氏 (3段)
- 11月14日 英国でライ病の新薬 “結核と同程度の病気” コクレーン博士が語る(読売 3段)

1957年(昭和32年)

- 3月19日 ライ療養所へ 朝日歌壇の点字訳 一年以上匿名で送り続ける 患者の歌集を見て好意の人も結核を療養(山形版 3段)
- 5月21日 救ライに三十八年 ナイチンゲール記章受ける 三上チヨさん(磯原町) (茨城版 4段)
- 8月20日 ライ患者の“手”に光明 初の整形手術に成功 岡山大 津下助教授の成果(日経 5段)
- 8月23日 ライ患者の上告棄却 死刑確定(夕刊 3段)
- 8月29日 ライ患者十人殺さる 朝鮮で住民と衝突(夕刊 1段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 8月31日 光田愛生園長辞任（1段）
- 9月 1日 “ライ患者の父”退職（大阪 2段）
- 9月 5日 『寸描』 長島愛生園長を辞職した 光田健輔（囲み欄）
- 11月7日号 救ライの六十年 光田健輔氏の業績（『週刊朝日』3ページ）
- 11月 8日 ライにきく新抗生物質 フランスで好成績（毎日 1段）
- 11月19日 おすすめしたい本 「生きてあれば」島比呂志著（大阪 1段）
- 12月 6日 ライ患者に“夜あけ” なおる神経マヒ 池田助教授、五年の研究実る（毎日 3段）
1958年（昭和33年）
- 1月11日 ライ菌を染色で識別 弘大の大高博士が成功（青森版 横3段相当）
- 2月20日 ライ研究に光明 菌の培養に成功 緒方教授 療法確率へ一歩前進
（日経 4段）
- 4月？日 ライ病退治に新発見 柳沢博士らの共同研究 BCG接種が効く 一石二鳥の効果
分る（夕刊日経 4段）
- 6月25日 『論壇』 『救ライの日』を「闘ライの日」に 社会は偏見を去り、当局は人権を
守り 玉井乾介（「死刑らい患者を救う会」事務局長、岩波書店第一編集課長）（3
段）
- 6月28日 救ライ事業に寄付（東京版 1段）
- 7月 8日 ライ患、韓国から密航 橋本厚相が閣議に報告（夕刊 4段）
- 8月20日 『天声人語』 結びは、「この不幸な人々を救うのは、健康な人々の義務である」(囲
み欄)
- 10月22日 ライの予防にBCG 臨床データまとまる（4段）
- 11月 9日 ライ感染ピタリ 西村阪大助教授 血清反応の研究実る（大阪夕刊4段）
- 11月11日 ライ治療の現状 あすから東京で国際ライ学会議 年々ふえる軽快退
所 注目される新薬・新療法（4段）
1959年（昭和34年）
- 3月 8日 失明ライ患者にツエを 消えた予算へ“救い” 盲人協会長の訴え実る（夕刊 4
段）
- 3月23日 “ライ盲者にツエを” おじいさん、奉仕に立ち上がる（西部夕刊横、3段相当）
- 4月 7日 心のツエ百二十本 目の不自由なライ患者に 青木さん寄贈（西部1段）
- 5月 7日 ライ対策を全面検討 きょうから国立療養所長会議 “軽快退所者”を中心に（横、2
段相当）
- 5月 8日 ローマ法王から初の表彰 ライ患者看護婦の井深さん（東京 1段）
- 5月14日 インドへ医師 ライオンズ・クラブ 国際的救ライへ（大阪夕刊 1段）
- 5月19日 救ライ後援のため宮崎医博渡印（1段）
- 5月28日 『人』 救ライ事業のためインドへ行く 宮崎松記（大阪 囲み欄）
- 9月28日 全生園五十年記念式（1段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 10月28日 前恵楓園長にインドから招請 ライ患者救いに(西部 1段)
- 11月10日 救ライ五十年 大島青松園をたずねて 七百余人が闘病 野島園長ら日夜 治療に
献身 (香川版 3段)
- 12月13日 『きのうきょう』 光田健輔翁 渋沢敬三(囲み欄)
- 12月29日 ライ患者の菊池さんも(1段 歌会始め関連記事)
1960年(昭和35年)
- 1月17日 ライ菌入り鶏盗まる 東北大の実験動物舎で(夕刊 3段。大阪は青鉛筆にリライト)
- 1月19日 ライ患者を俳句で慰問 全国の療養所を回る 大阪の料理屋さん 師の遺志ついで
25年 (大阪 4段) *好意的反響文1月24日掲載
- 1月20日 ライ患者殺し自供 指名手配の文 自殺しきれず(2段)
- 3月 1日 法務局、県に警告 ライ誤診事件 必要な専門医の診断 大分(西部 3段)
- 3月 1日 ライ療養所で初の公開録音 朝日放送「お笑い街録」(大阪 囲み)
- 3月 4日 『大学生』 偏見とのたたかい 欠かさぬ夏休みの慰問 科学への信仰受けつぎ
大阪歯大の救ライ奉仕団 (大阪 連載欄)
- 3月26日 悲願の救ライ映画製作へ 家も売り引退作家 四月から素人ばかり長島を舞台に
大谷楽苑もコーラスで協力 (大阪夕刊 3段)
- 4月21日 山陽線で消毒騒ぎ ライ患者が乗り込む(大阪 2段)
- 4月21日 邑久光明園 - 檀原(奈良) 結ぶ愛のかけ橋 故郷の香をこめて 晩成校の学童 ラ
イ患者へ贈りもの (奈良版 横、3段相当)
- 5月22日 ライ療養所の看護婦 集団ノイローゼ 衆院でも近く追及 労働加重のため 東京
多摩全生園 (大阪 3段)
- 6月10日 インドのライを救おう 日本で国民運動 宮崎博士 下旬に帰り訴う
(大阪夕刊 4段)
- 6月19日 「救ライの日」記念 愛生園から 水虫程度の伝染病 40年後、患者なくなる N
HK二つの特集 (夕刊 3段)
- 6月25日 七氏を表彰 きょう救ライの日(1段)
- 7月 1日 インドのライ調査の宮崎博士帰る(大阪 1段)
- 9月21日 『社告』 救ライ慈善演奏会 江藤俊哉氏夫妻(夕刊 1段)
- 11月21日 ハンセン氏病に思う 丸山千里(日本医大教授・皮膚科) (囲み 3段)
- 12月16日 “医師よこせ” 長島愛生園で(東京本社版 1段)
同 お医者さんふやして 長島愛生園 全園一体で決起大会(大阪 4段)
- 12月16日 “非人道的”と叫ぶ 医者よこせ総決起大会(岡山版 2段)

【読売新聞】

1954年(昭和29年)

- 6月27日 「救ライ基金に寄託」(1段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1955年(昭和30年)

- 5月10日 「ライ患者仙台で保護」(1段)
- 9月26日 「全生園で200人食中毒」(2段)

1956年(昭和31年)

- 1月13日 「ライ患者、沖縄から4名潜入」(3段)
- 4月 9日 「八塚女史が一位 パリの国際論文大会で」(夕刊1段)
- 11月14日 「英国でライ病の新薬」(3段)
- 12月 2日 「人生案内」夫は恐ろしい病気か

1957年(昭和32年)

- 1月25日 「人生案内」親類にらい病患者
- 3月 2日 「人生案内」父母が婚約に反対
- 5月20日 「二人にナイチンゲール章」(夕刊2段)
- 8月30日 「南鮮でライ患者暴動」(夕刊1段)
- 8月31日 「光田翁が退職」(夕刊1段)
- 12月13日 「人生案内」彼女の父親がライ病

1958年(昭和33年)

- 6月11日 「ライ患者への献身」 光田健輔著「愛生園日記」(夕刊2段)
- 7月 8日 「韓国のライ患密航」(夕刊3段)

1959年(昭和34年)

- 4月24日 「ライ菌の動物移植に成功か」(1段)
- 10月 3日 「人生案内」結婚はできないか 彼女の父がハンセン氏病の風聞

1960年(昭和35年)

- 1月10日 「ライ療養所の殺人 多磨全生園で婦人の絞殺体」(4段)
- 1月11日 「野放しのライ患者 多磨全生園の場合」(5段)
- 同 「同園者と断定 ナカさん殺し」(1段)
- 1月12日 「外出患者名確認へ 全生園の女患者殺し」(夕刊2段)
- 1月14日 「失跡の患者追及 全生園殺人に有力容疑」(夕刊3段)
- 1月20日 「ライ患者殺しを自供 『文川』横浜で自殺はかる」(3段)
- 1月20日 「文川を田無署へ護送」(夕刊1段)
- 4月12日 「ライ患者殺し無期求刑」(1段)
- 5月 3日 「ライ患者殺しに無期」(1段)
- 8月 5日 「大田主席、厚相に要望」(1段)
- 10月18日 「業病と早合点の悲劇 赤羽の無理心中」(3段)

【産経新聞】

1956年(昭和31年)

- 6月24日 救ライの6氏を表彰 記念の日を迎えて(朝刊社会面3段相当)
9月27日 ライの治療薬を発見 大阪病院長が発表 神経マヒも直り、斑紋も消える(産経時事 4段)

1958年(昭和32年)

- 11月12日 高松宮さま開会を宣言 第七回国際らい学会議開く(夕刊2段)

1960年(昭和35年)

- 1月 9日 東村山に女の水死体 首を絞めた形跡 入院患者同士の痴情か(朝刊社会面 3段)
3月 8日 私は無実です! 死刑囚のライ患者が悲痛な叫び “手を抜いた裁判で 証拠デッチ上げ” 最高裁への特別抗告もダメか 藤本松夫という男 平和な一家どん底に軽い症状に“入園通知” 短銃を乱射して逮捕(朝刊10面 特集 話題パトロール)
7月15日 救ライ に結ばれた 子ブタ物語 献金箱を全家庭に 日本のライ実情(夕刊4面 特集 話題パトロール)
10月17日 妻子4人を刺殺 ライ病の診断と勘違いし 特許庁吏員が心中図る(夕刊社会面 4段)
12月17日 東京風土図 北多摩郡 全生園、悲田処あと(夕刊4面連載 7段)
12月24日 “ポート君” が会いたがってます 「救ライ 献金」の送り主(朝刊都内トップ4段)

【地方新聞等 (東奥日報)】

1954年(昭和29年)

- 2月17日 一般学校に“通学” 法務省で結論 ライ療養所で非感染児童(朝刊3段)
5月31日 成否危うし定員法改正 通らねばライ患者のデモ(朝刊)
6月12日 秋田駅にライ患者 自転車泥の本県人と判明(朝刊ベタ)
6月23日 松丘保養園、弘前病院が東北大会へ 国立病院、療養所対抗野球(朝刊ベタ)
6月30日 常岡参院議員松丘保養園など視察(朝刊ベタ)
12月14日 師走の巷に明るい話題 ライ患者に光の手 わが身の不遇忘れて励まし合う弘前盲学校聖書の展示本など贈る(朝刊5段)

1955年(昭和30年)

- 2月11日 ライ患失明者に点字本 弘前愛盲協会 松丘保養園に寄贈(朝刊3段)
5月19日 点字に見出した生活の喜び 舌や唇で読む聖書 松丘保養園の盲の患者 文集出す計画も(朝刊3段)
6月 2日 20年ぶりに市民合奏団 皆に親しまれる音楽を(朝刊3段)
6月 2日 天皇のお計らいで映画貸下げ(朝刊ベタ)
6月22日 慰安行事を計画 25日の“救ライの日”(朝刊)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1956年(昭和31年)

- 1月20日 三カ年計画で無医村解消 高血圧治療センター 新たに国立弘前病院もライ 患者子弟の就職あっせん(朝刊4段)
- 2月27日 豚小屋焼く 松丘保養園(夕刊ベタ)
- 6月11日 縁の深い療友の歌集 「天河」と「海鳴り」を読む 内田守人(朝刊ハコ)
- 6月17日 ライ患者の子を教えて20年 なぜ冷たい世間の眼(朝刊4段)
- 6月26日 新刊紹介 甲田の裾 五・六月号(朝刊ベタ)

1957年(昭和32年)

- 1月 6日 松丘保養園にカトリック教会(朝刊1段・写真)
- 5月21日 ナイチンゲール章 長島、三上両女史に(朝刊2段)
- 11月8日 いじめずに明るい感じ 松丘の二葉分校 全国療養児童展覧開く(朝刊 4段)
- 11月10日 歌集白樺 ハンセン氏病患者の作品よむ 中野菊夫((朝刊2段)
- 12月 8日 唐牛さんがまた点字タイプ贈る(夕刊ベタ)

1958年(昭和33年)

- 3月 3日 BCGでライの予防 柳沢博士、近く海外に発表 感染、発病にも効果(夕刊 4段)
- 5月 8日 患者さん楽しい一日 松丘保養園で演奏会(朝刊ベタ)
- 7月13日 女のことから出刃で切る 松丘保養園で(夕刊ベタ)

1959年(昭和34年)

- 2月24日 ライ園に春の訪れ 効薬と進学で笑いとゆとり 四月に修学旅行 松丘 二教師の情熱実る(朝刊4段)
- 6月15日 半世紀で5分の1 奇跡生んだプロミン ライ 注目をひく日本の反応検査法 6月25日救来ライの日(上)(朝刊)
- 6月16日 この人 救ライ事業功労者としてローマ法王から表彰される 井深八重子(朝刊人ものハコ)
- 6月25日 きょう「救ライの日」 もう“業病”ではない 明るさ取り戻した患者たち(朝刊4段・写真)
- 10月 3日 創立50年を迎える 青森市松丘保養園(朝刊ハコ・写真)
- 11月 3日 同郷のよしみへ感謝あるばかり - 菊池奇骨氏 病の柳人励まし 旧友が句集、句碑作る(朝刊5段・写真)

1960年(昭和35年)

- 5月11日 全役員を再選 県らい協總會(朝刊ベタ)
- 5月22日 点字印刷機をさらに改良 盲人も文通できる(朝刊4段)
- 6月25日 励ましの手のべよう きょう「救ライの日」(朝刊4段・写真)
- 12月25日 保養園を慰問 東奥義塾・聖愛高生徒(朝刊1段)

3. 1961年から1975年末まで

【朝日新聞】

1961年(昭和36年)

- 2月 6日 光田健輔氏にダミアン・ダットン賞(2段)
5月27日 愛生園をバラでうめよう 知事や市長さんも姿みせる 京都で“運動”の即売会(大阪夕刊 3段)
7月 6日 「愛生園」などへ文庫 京都主婦の会の救ライ運動(京都版 3段)
11月26日 小島をバラいっぱい 瀬戸内海の療養所へ 運動実ってあす植樹式(大阪 横2段)
12月26日 “ライは治る”とPR 多磨全生園 年賀状を利用して(都下版 3段)

1962年(昭和37年)

- 1月27日 救ライ運動功労者 ロスさんも激励 「小島をバラ園にする会」きょう舞踊会(京都版 3段)
2月10日 ライにきく結核ウワクチン マヒ神経などが回復 有効例すでに七百人余 丸山千里(夕刊 3段)
3月12日 シュバイツァー博士から感謝の便り 愛国学園の女生徒たちへ 贈った博愛の十万円 高橋博士の講演きいて(4段)
6月26日 救ライ事業の功労者を表彰(1段)
11月 4日 長島愛生園に明るい笑い 十周年大会祝う川柳グループ 記念句集を近く出版 深刻な悩みも読み込む(大阪 4段)

1963年(昭和38年)

- 1月28日 アフリカのライ病院舞台に グレアム・グリーン of 最新作 NHK第2 100分の長編ドラマ(テレビ番組案内欄 横2段)
1月30日 ライ病院から逃げ無賃乗車 急行電車を消毒(夕刊 1段)
2月 9日 救ライ病院 秋ごろ着工 訪印の那須博士帰国(1段)
3月16日 演奏に患者ら大喜び 呉海上自衛隊、長島愛生園を慰問 片桐さんの願い実現(岡山版 横3段)
4月16日 “小島に愛のバラを” ライ患者慰める圭三ショー『花』=TBSテレビ(番組案内欄 3段)
5月 1日 生命尊重の村ランバレネ 一匹の蚊をいつくしむシュバイツァー博士(大阪夕刊 写真特集 4段)
5月19日 「季節風」 暗い療養所を描く(大阪 1段)
5月23日 上陸寸前みつかる 神戸港 奄美からライ患者(大阪夕刊 2段)
5月31日 インド救ライ事業 協定書に調印(大阪 1段)
6月21日 長島愛生園 患者の苦悩浮彫り 「救ライの日」に句集出版(大阪夕刊 4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 9月 1日 ライ施設へ千羽ヅル 赤穂の杉ノ子こども会（姫路版 4段）
- 9月24日 愛ゆえに夫から去る ライ病と診断された女＝TBSテレビ（番組案内案欄 2段）
- 10月 2日 「国際ライ会議」に出席して 佐藤三郎（夕刊 3段）
- 10月27日 ホノルル 回復後の養護は十分 ライ患者の楽園 美しい海岸に、百年の歴史（夕刊 横3段）
- 12月16日 救ライセンター アグラで定礎式 日本国民の浄財で建設（大阪 横2段）
- 12月21日 森幹郎著「足跡は消えても」|人物日本ライ小史|（大阪 1段）
1964年（昭和39年）
- 4月17日 「季節風」 あるテレビドラマへの疑問（大阪 2段）
- 5月10日 愛生園名誉園長に ライ病の権威 光田さん（岡山版 2段）
- 5月12日 14日 静岡・山梨のライ患者慰問 大阪救癩協会（大阪版 1段）
- 5月14日 （死亡記事）光田 健輔氏（大阪夕刊 1段）
- 5月14日 光田先生を悼む 林芳信 慈愛の心で見える人 救ライに一生をささげる（2段）
- 5月15日 生涯を“救ライ”に 世界に貢献した研究（大阪 2段）
- 5月15日 ライとの戦いに終始 光田さんの死 悲報に沈む島の人たち（岡山版3段）
- 6月 2日 防府で光田翁市葬（1段）
- 6月11日 「生きる」 小島をバラの花園に 救らい事業 福井八重子さん（大阪 囲み2段）
- 6月23日 「きのうきょう」 我が道 秋山ちえ子（大阪 1段）
- 8月11日 地元民から横ヤリ ライ回復者の施設建設（奈良版 3段）
- 10月22日 収集品を売って協力 ライ絶滅への願いにこたえ 夢殿建設資金に江頭さん（京都版 横3段）
- 11月 4日 県がハンセン氏病全治者を招く 鳥取 “島”から故郷へ旅 世間の誤解とくしみ（4段）
- 11月 4日 ハンセン氏病全治者 鳥取県が故郷に招く 社会復帰を願って（大阪4段）
- 11月 5日 二十年ぶり 故郷鳥取へ ハンセン氏病全治の四人（1段）
- 11月 5日 収容者の郷愁訴える ハンセン氏病歴者鳥取入り（大阪 3段）
- 11月 5日 「人」 ハンセン氏病全治者の郷里招待を思いついた 加倉井駿一鳥取県厚生部長（大阪 囲み1段）＝東京は11月7日
- 11月14日 各地から相次ぐ賛辞 反響呼んだ病歴者の“里帰り”（鳥取版 横3段）
- 11月25日 40人ハンスト 愛生園の患者（岡山版 1段）
- 12月 8日 三次高に募金袋 ハンセン氏病 インドの実情きき（呉版 3段）
- 12月 8日 “他の土地に建設へ” ハンセン氏病回復者の家 奈良市長申入れ（奈良版 3段）
- 12月11日 “ふるさとの香り”を 鳥取県から長島愛生園へ チューリップ球根五百個（2段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1965年(昭和40年)

- 2月14日 「新日本列島」 長島愛生園(岡山県) 窓は開かれたが..... ハンセン氏病へ消えぬ偏見(囲み 3段)
- 3月 6日 奈良県でも里帰りを決める ハンセン氏病無菌者(1段)
- 3月20日 六月から巡回診療 インド救ライ・センター 宿舎が完成、本館は11月に(4段)
- 4月22日 偏見に苦しむ人救う 近畿中国 十五府県の共同事業(大阪夕刊 4段)
- 4月22日 奈良県出身者集団の里帰り 愛生・光明園療養者(大阪夕刊 1段)
- 5月11日 ハンセン氏病の十人里帰り 奈良で二泊三日(大阪 1段)
- 5月11日 感動を呼ぶ人間愛 青柳緑著「光田健輔氏の生涯」 癩に捧げた八十年(読書欄 横1・5段)
- 5月18日 看護婦さん初名乗り ハンセン氏病救いにインドへ(大阪 3段)
- 6月 6日 母国の救ライに義金 在日インド人ら 渡印の宮崎博士に(大阪 1段)
- 6月21日 ハンセン氏病に理解 厚生省など運動始める(1段)
- 6月21日 「今日の問題」 ライへの理解(夕刊囲み 1段)
- 7月25日 「人」 救ライ院長としてインドに行く宮崎松記(大阪 囲み1段)
- 7月26日 歯の治療に台湾へ 大阪歯大救ライ奉仕団 十五カ所で数百人に 十八年の実績 今夏も招かれて(大阪 4段)
- 8月21日 ハンセン氏病の患者 横浜刑務所を出る(夕刊 3段)
- 9月 8日 全快祝い高野山参り 長島愛生園の八十九人(夕刊 2段)
- 10月 9日 里帰り施設建設へ ハンセン氏病の全快者 社会復帰の道開く 和歌山(大阪 3段)
- 12月30日 七十四歳の老医師ら四人 インド救ライ第二陣(大阪 1段)

1966年(昭和41年)

- 1月10日 長島愛生園の病舎焼く 患者らは全員無事(大阪 1段)
- 1月31日 経済使節団も出席 インドの救ライ式(大阪 1段)
- 2月22日 里帰り費用を予算化 奈良、ハンセン氏病患者に(大阪 1段)
- 4月28日 手足変形はグルタミン欠乏 日本ライ学会総会で宮城の石川医師 ハンセン氏病に新療法発表(大阪 横3段)
- 5月13日 「ライ病院爆撃で三十人死ぬ」 北ベトナム抗議(夕刊 1段)
- 6月18日 映画会でPR あすから「らいを理解する週間」(1段)
- 7月31日 神戸から沖縄へ 女高生十人出発 ハンセン氏病病院慰問(大阪 1段)
- 10月14日 ライ菌の純粋培養に見通し 国際病理アカデミー(大阪 1段)

1967年(昭和42年)

- 1月31日 アジア救ライ協会インドセンター開所 タジ・マハール近くに人類愛の殿堂 治療と研究に威力 日印親善に生きる浄財(大阪 4段)
- 4月26日 慈父救ライに死す インドに病舎建設へ奔走 宮崎博士と固い約束(大阪 4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 6月16日 中学生ら47人感染 沖縄の離島調査で分る 二年ぐらいで治る(4段) = 大阪は「ハンセン氏病本土の10倍も 宮古・八重山群島の調査 家庭・学校でも感染 医師不足 潜在する保菌者」(夕刊4段)
- 6月26日 両陛下迎えて十五周年式典 救ライ藤楓協会(1段)
- 7月29日 夏休みの大学生たち 社会復帰施設つくる 奈良 ハンセン氏病患者救おう(夕刊横3段)
- 8月21日 沖縄のハンセン氏病を視察 大阪救ライ協会の一行(1段)
- 9月12日 沖縄へ検診・調査班 結核・ハンセン氏病対策 厚生省 総理府(4段)
- 9月26日 ライ療養者の作品展ひらく(夕刊 1段)
1968年(昭和43年)
- 1月22日 苦しい開院一周年 日本人のインド救ライ病院 薬も資材も不足がち休むひまがない医師団(4段)
- 3月19日 インド救ライ病院の充実に 宮崎院長が帰国(2段)
- 3月26日 老内科医長近く退職 長島愛生園 研究・治療に47年取り組む 少ない後継者に心残して(岡山版 4段)
- 5月 3日 政府も力貸せ インド救ライセンター充実に佐藤首相に要望(大阪 1段)
- 5月10日 インドへ二医学生 夏休みに救ライ計画 東大の堺君と設楽君 帰国中の宮崎博士も大歓迎(大阪 横3段)
- 6月 6日 沖縄ライ患者救済に二千万円寄金へ ライオンズ大会で決定(大阪 1段)
- 6月21日 医師が善意の応援 インドの救ライセンター 来月赴任 世田谷の斉藤夫妻(3段)
- 6月28日 「青鉛筆」 学生らが救ライ募金
- 7月7日号 ライ問題は解決してない! 日本のライと沖縄のライ 保健(朝日ジャーナル)
- 7月24日 近く待望の里帰り 韓国で闘病27年の老人 ハンセン氏病好転(大阪 2段)
- 8月 8日 ライ菌培養に成功 ワクチンへの道開く 予防研の室橋氏が発表 日米医学協力委(5段)
- 8月 9日 「天声人語」 = ライ菌培養等
- 8月 9日 ハンセン氏病との戦い(大阪 1段)
- 8月 9日 これが培養されたライ菌(夕刊 3段)
- 8月14日 「人」 世界初のライ菌培養に協力した 吉田幸之助(囲み 1段)
- 12月22日 国の補助金ふやして ハンセン氏病患者が国会に陳情(1段)
1969年(昭和44年)
- 3月29日 “日本の善意”も海外進出 インドの救ライ・センター 来月から本格診療 宮崎院長 “経済動物は返上”(4段)
- 4月 4日 国立療養所大島青松園 野島園長惜しまれ退職 ハンセン氏病と45年 これからは研究一本に(香川版 4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 4月19日 ライ菌培養 四代目まで成功 国立予防衛研 予防・治療に期待(3段)
1970年(昭和45年)
- 3月3日 (死亡記事)野島泰治氏 大島青松園名誉所長(夕刊 1段)
- 5月2日 「標的」 あつい壁(大阪夕刊 囲み1段)
- 5月15日 「地に生きる」藤川治水氏 無知と偏見の“厚い壁”ハンセン氏病 自主映画で打破る(大阪夕刊 3段)
- 7月1日 「文化」ハンセン氏病者の歌集を編んで 内田守人氏 歌で社会と心の握手 救いなくとも孤独感薄める(西部夕刊 4段)
- 8月7日 ハンセン氏病 外来診療行え 調査会、厚相に報告(大阪 1段)
- 11月6日 40周年迎える長島愛生園 治療中は約350人 “暗さ”あいついで改善(岡山版 4段)
- 12月7日 (死亡記事)網脇竜妙氏 財団法人身延深敬園園長兼理事長(1段)
1971年(昭和46年)
- 1月10日 「カルテ」ライ患者の孫との結婚 遺伝は全くない 大切なのは勇気(3段)
- 1月26日 「ぼだい樹の木陰で」インドで救ライ活動の宮崎博士 30日「人物につぼん」で放映(熊本版 横2段)
- 2月18日 「標的」福祉なくして...(大阪夕刊 囲み1段)
- 3月12日 「今日の問題」沖縄のハンセン氏病(夕刊 囲み1段)
- 4月5日 ライ菌培養を否定 学会 室橋氏は不満(横2段)
- 6月3日 「標的」カケのあがり(大阪夕刊 囲み1段)
- 9月19日 ことしは66人里帰り 無菌の人 ハンセン病療養所から(長崎版 4段)
- 9月19日 ハンセン病菌を培養(日曜版 1段)
- 11月18日 励ましの募金 救ライの宮崎博士に 日奈久の母校で、父母も(熊本版 2段)
1972年(昭和47年)
- 2月13日 ハンセン病にも耐性菌(日曜版 1段)
- 2月19日 ハンセン病者の社会復帰 NHKが放送中止 「それこそ無理解だ」と協力者(横1・5段)
- 2月21日 インドのハンセン病にコロポ計画(名古屋夕刊 1段)
- 5月13日 母よ、生きていて ハンセン病克服した砂川さん 37年ぶり里帰りへ(大阪 3段)
- 5月23日 聞いて下さい私たちの音楽 盲目のハンセン病回復者楽団、朝日座であす公演 一女性の奔走実り財界・文化人も応援(大阪版 横4段)
- 6月13日 「あつい壁」上映 17・18日、大阪S A Bホール ハンセン病差別を告発(大阪夕刊 横3段)
- 6月16日 「今日の問題」救ライ博士の死(1段)
- 6月17日 教えられた「生きる尊さ」聴衆に深い感動 いまも続く反響の声 ハンセン病者

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

の演奏会（大阪 3段）

- 6月19日 宮崎松記博士、インドの土に 救ライ協会センターで火葬（3段）
- 6月22日 「正しい知識広めて」 ハンセン病患者 県に偏見除去訴え（長崎版 3段）
- 6月25日 「生きるなかま」 最低のハンセン病対策（日曜版 横3段）
- 6月26日 両陛下お迎え 救ライの集い（1段）
- 6月27日 ハンセン病に理解を 菊池恵楓園患者が県に陳情（大分版 1段）
- 7月 4日 われわれを人間並みに ハンセン病患者初めて街頭デモ できぬ社会復帰 医師も薬も不足だらけ（4段）
- 7月 4日 施設改善など訴え 国立菊池恵楓園 患者が決起集会（熊本版 2段）
- 7月12日 深夜、全生園で火事（4段）
- 7月20日 全国ハンセン病連絡協が発足（1段）
- 7月27日 ハンセン病の847人に特別給与金を支払い（1段）
- 8月21日 着実に進むインドの救ライ事業 宮崎博士の遺志結実 期待される本研究陣（3段）
- 9月18日 療養所職員を減らさないで ハンセン病患者協訴え（夕刊 1段）
- 9月23日 “幻の作家”北条民雄 川端さんの励ましの書簡発見 死後35年命浮彫り 温かく時には厳しく 原稿用紙を与え添削も 東京のハンセン病療養所（6段）
- 9月25日 「声」 韓国の患者に温かい衣類を（2段）
- 10月16日 韓国のハンセン病患者へ 衣類や寄金ぞくぞく 本紙声欄の呼びかけですすでに三万余点 ともしびグループ 近く二便を発送 名古屋（名古屋 4段）
- 10月23日 誤爆の実態を暴露 米の元情報部員 「北」のライ病院爆撃（2段）
- 10月25日 「声」 韓国の患者への援助にお礼（1段）
- 11月21日 「あつい壁」を自主上映 ハンセン病差別を告発 労組員らが実行委作り 豊中（大阪版 横3段）
- 12月 2日 「ハンセン病対策に役立てて」 自主上映の利益寄付 「あつい壁」上映実行委（大阪版 2段）
- 12月30日 「あつい壁」を見た ハンセン病対策に 豊中二中生徒会が寄付（大阪版 1段）
1973年（昭和48年）
- 1月22日 仏教文化交流センター 長崎で救ライの街頭募金（長崎版 1段）
- 2月 8日 韓国ハンセン病患者へ衣類 交流深まり、近く第二便 ともしびグループ（名古屋夕刊 3段）
- 4月11日 「標的」 長島架橋（大阪 囲み1段）
- 9月18日 成果あげた在宅治療 ハンセン病患者が激減（沖縄版 3段）
- 11月 6日 「ひと筋」 桜井万策（大阪版 囲み1段）
- 11月18日 ハンセン病施設 多磨全生園で火事 木工場など七棟焼ける 強風と暗ヤミ 患者、恐怖の避難 病舎までわずか50メートル（4段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 11月28日 “難病の村”助けて 数百人、悲惨な暮らし 韓国からの帰国女性訴え(大阪 4段)
1974年(昭和49年)
- 1月9日 韓国のハンセン病共同体 移転費用に援助を 日本の学生呼びかけ(大阪 3段)
- 3月21日 ハンセン病解明に手がかり アルマジロで菌培養に成功 米誌報道(3段)
- 4月1日 闘病50年の明るさ 藤本とし著 地面の底がぬけたんです(横2段)
- 4月26日 絶やすまい世間との“パイプ” 39年続くハンセン病患者の機関誌編集を1人で守る
星塚敬愛園 患者減り原稿に悩み(鹿児島版 3段)
- 5月4日 (こころのページ)ハンセン病救済一筋に 宮崎博士の3回忌迎え常盤さんに聞く
慈父とあおがれてインド人の胸中に(大阪 横3段)
- 7月3日 ハンセン病救済記録をスライドに 療養歴史を軸に編集 付ける録音すでに完成
熊本市琵琶崎待労病院の板倉院長(熊本版 3段)
- 7月4日 府出身患者見舞いで 知事、長島愛生園へ(大阪版 1段)
1975年(昭和50年)
- 5月21日 韓国のハンセン病患者に支援の輪 下関ロータリークラブの会員ら聖ラザロ村を慰
問 「息の長い募金活動を」(下関版 4段)
- 6月20日 俳句活動で支える25年 ハンセン病患者へ 「雲海」主宰の北区・近藤さん 泊ま
り込み共に句作 互いに友情芽ばえる成果(大阪版 4段)
- 7月18日 皇太子ご夫妻 海洋博会場入り ハンセン病患者ご慰問(夕刊 4段)
- 10月26日 ハンセン病原菌の試験管培養に成功 ハワイ大教授が発表(1段)
- 10月28日 「青い鳥」が公開演奏会 ハンセン病入園者の楽団(1段)
- 11月1日 きょう患者と合同演奏会 鹿屋 星塚敬愛園 ハンセン病医療に尽くし40年(鹿児
島版 横3段)

【読売新聞】

- 1960年(昭和35年)
- 1月11日 野放しのライ患者 多磨全生園(5段)
- 1965年(昭和40年)
- 4月29日 救らい一筋に40年 三上チヨさん(3段)
- 6月23日 篠原さんに感謝状 救ライ事業に長年つくす(3段)
- 1967年(昭和42年)
- 6月18日 生きる力をみつめて 神谷美恵子(7段)
- 6月26日 らいを理解するつどい開く 両陛下を迎えて(2段)
- 1968年(昭和43年)
- 5月11日 沖縄離島に「ハンセン氏病」流行(2段)
- 8月8日 ライ菌培養に成功 予研の室橋博士(6段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 8月13日 時の人 室橋豊穂(囲い込み・6段相当)
1969年(昭和44年)
- 7月10日 サリドマイドがライ病の特効薬(2段)
1972年(昭和47年)
- 6月23日 救ライの灯消さず 宮崎博士の葬儀(4段)
- 6月26日 救ライ「藤楓協会」20周年記念式典(2段)
1973年(昭和48年)
- 1月22日 墜落死の宮崎博士 胸像がインドへ(囲い込み=6段)
1974年(昭和49年)
- 12月21日 ハンセン病と梅毒研究 村田正太さん死ぬ(3段)
1975年(昭和50年)
- 6月24日 社説「らい」に正しい理解と温かい目を(5段相当)

【毎日新聞】

- 1963年(昭和38年)
- 6月25日 初の退所者更生施設つくる きょう救ライの日(朝刊ベタ)
- 6月29日 石川往来 “ライ病はなおる”(朝刊(石川版)囲み・写真)
- 8月5日 救ライ奉仕団出発 奄美大島などで歯の治療(朝刊ベタ)
- 10月2日 「国際ライ会議」に出席して 佐藤三郎(朝刊5段)
- 10月7日 重患に驚く効果 内服薬DOT ライに新薬二つ(中部朝刊3段・ヨコ見出し)
1964年(昭和39年)
- 5月14日 死人・光田健輔氏(夕刊ベタ)
- 5月15日 終日深い悲しみに 救ライの戦士・光田氏眠る 患者たち、心から黙とう(朝刊(岡山版)5段・写真)
- 5月15日 「心の柱」失ったよう 悲痛な表情で交々語る(朝刊(岡山版)7段)
- 11月4日 鳥取県がハンセン病全治者を招く “島”から故郷へ旅 世間の誤解とくしみ 危険もなく大変結構(厚生省公衆衛生局長の話)(大阪朝刊5段))
1965年(昭和40年)
- 2月14日 新日本列島 窓は開かれたが……長島愛生園 ハンセン病へ消えぬ偏見(朝刊6段・写真)
- 6月20日 ライ患者に暖かい目を 厳しい社会復帰 きょうから正しく理解する週間(朝刊5段)
- 6月26日 『生活の壁』乗り越えて 冷たい目にも負けず 元ライ患者の妻の記録(朝刊3段・写真)
- 10月1日 ハンセン氏病全快者に“社会復帰センター” 関西労働キャンプの学生たち 自力で“いこいの家”(朝刊7段・写真)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1966年(昭和41年)

6月22日 高橋博士夫妻が帰国 シュバイツァー病院をやめて(朝刊3段)

6月6日 両陛下迎えて15周年の式典 ライ救済藤楓協会(朝刊2段)

1967年(昭和42年)

4月25日 死人・飯野十造(アジア救ライ協会評議員)(夕刊ベタ)

6月16日 47人がハンセン氏病に 沖縄宮古・八重山の学童ら(朝刊3段)

7月31日 雑記帳・社会復帰センター“交流の家”完成(大阪朝刊ベタ)

1968年(昭和43年)

5月12日 ハンセン氏病多発 沖縄多良間島 こども24人も(朝刊3段)

5月13日 世界に生きる 日本人の記録 手術に検視に看護に献身 台湾救ライの3人(夕刊7段・写真)

6月19日 沖縄のハンセン氏病は誤診(夕刊3段)

6月23日 社会とのつながり求めて あす大阪で初演奏会 長島愛生園の楽団“青い鳥”(大阪夕刊3段・ヨコ見出し・写真)

7月13日 社告・韓国へ救ライ歯科医療奉仕団(朝刊2段)

7月14日 韓国救ライ歯科奉仕団の壮行会(朝刊3段)

7月14日 20日、韓国へ出発 大阪歯大の救ライ奉仕団(大阪朝刊2段)

7月16日 生活待遇の改善求め座り込む ハンセン氏病患者が厚生省で(朝刊3段)

7月20日 韓国救ライ歯科奉仕団24人が出発(夕刊3段)

7月27日 沖縄で救ライ運動 学生18人出発(朝刊ベタ)

8月6日 韓国救ライ団帰る(大阪ベタ)

1969年(昭和44年)

4月19日 ライ菌培養 四代目まで成功 国立予防衛研 予防・治療に期待(夕5段)

7月13日 ライ患者を救おう 県仏教会立ち上がる 11支部が募金活動へ(朝刊(福島版)4段)

7月26日 救ライ啓発隊沖縄へ 学生連盟の23人(夕刊2段)

1970年(昭和45年)

1月8日 ハンセン氏病の差別なくせ 熊本で自主映画(夕刊2段)

10月26日 ハンセン氏病菌を純粋培養 大岩京大助教授 世界で初めて成功(中部朝刊4段)

1971年(昭和46年)

1月16日 沖縄・愛楽園をたずねて 患者七百に医師三人(朝刊6段・写真)

6月21日 ライを正しく理解する週間 私の人生59歳いま開く ライ病に勝った 友情に包まれ初めて就職(朝刊・特集4段・写真)

6月21日 ライを正しく理解する週間 きょうから(朝刊ベタ・ヨコ見出し)

6月30日 窮状訴える ハンセン氏病患者代表(朝刊ベタ)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 8月13日 ライ菌をアルマジロへ 動物感染に成功 米連邦療養所(夕刊3段)
1972年(昭和47年)
- 3月28日 NHK、一部カットし30日放送 ハンセン氏病扱ったTV『人間列島』(朝刊ベタ)
- 7月4日 平等な医療の道を... ハンセン氏病患者ら決起(朝刊3段)
1973年(昭和48年)
- 7月20日 「偏見なくせ」と連絡協議会 ハンセン氏病療養所の12市町(朝刊2段)
- 8月8日 ライ菌培養に成功 細菌学者、多年の夢実る 予研・室橋博士(大阪朝刊8段)

【地方新聞 (東奥日報)】

- 1961年(昭和36年)
- 2月6日 光田博士にダミアン賞 ア前大統領からもメッセージ ライ治療にささげた功績に
(夕刊・ヨコ見出し・写真)
- 2月25日 松丘保養園の鶏小屋焼ける(夕刊ベタ)
- 4月26日 保養園など慰問 県救らい協会総会(朝刊ベタ)
- 5月15日 この人 ナイチンゲール賞を受けた 井深八重子(夕刊・人物ハコ)
- 6月22日 鈴木氏(野辺地町)らが表彰 救らい事業の進展に貢献(朝刊2段)
- 6月25日 年々ふえる社会復帰 きょう救ライの日 驚くほどの明るさ 松丘保養園 社会の
理解も深まる(朝刊5段・ヨコ見出し)
- 12月31日 松丘保養園で32万円盗難(朝刊ベタ)
1962年(昭和37年)
- 1月3日 狂言だった32万円盗難(朝刊ベタ)
- 4月24日 県外患者の慰問も 県救来ライ協会 15周年の記念計画(朝刊2段・囲み)
- 4月28日 “ライの起源は魚の抗酸菌か” 東北大佐藤教授が発表(朝刊3段)
- 6月16日 投書 「救ライの日」に思う(夕刊ベタ)
- 6月21日 小野氏、救ライの日に表彰(朝刊ベタ)
- 6月25日 特効薬で“業病”は昔 きょうは救ライの日(朝刊4段・写真)
1963年(昭和38年)
- 1月27日 米国で新レブラ・ワクチン ワクチンは疑問(専門家談話)(朝刊ベタ)
- 3月8日 生徒が一人の分校 青森市新城小二葉分校(朝刊ベタ)
- 6月19日 ライ病と戦う人たち 社会復帰に努める 25日は「救ライの日」 慰問と励まし続々
(朝刊5段・写真)
1964年(昭和39年)
- 2月6日 心痛む望郷の歌 松崎水星歌集「樅の木」 戸塚博(朝刊3段)
- 6月7日 付き添いの作業を拒否 全患協が実力行使(朝刊ベタ)
- 6月10日 全患協の闘争体制解く(朝刊ベタ)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 6月22日 社説 ライ征服と社会復帰に協力を 一般の正しい理解が推進力(朝刊)
- 6月27日 強い「ウチ」「ヨソ」意識 救らい思う(朝刊3段)
- 7月27日 松丘保養園で奉仕 立大などの男女学生十六人 闘病者と交歓も(朝刊2段・写真)
- 8月17日 投書 保養園移転案は迷惑(朝刊2段)
- 10月31日 点訳一人で46冊も 10周年の弘前愛盲協会 各層から奉仕者(夕刊4段)
- 12月17日 テレビでよい正月を 青森の二つのライオンズク 松丘に贈る(夕刊・ヨコ見出し・写真)

4. 1976年から1990年末まで

【朝日新聞】

1976年(昭和51年)

- 2月1日 カゼで?11人死ぬ 長島愛生園(大阪2段)
- 2月12日 偏見消そうと自費で歌集 元ハンセン病患者の横山さんが出版 草津闘病19年の500首集録 「過去隠す時代はすぎた」(群馬版5段)
- 5月13日 一世紀の挑戦 阪大で成功 ハンセン病菌の動物移植 撲滅に期待(夕刊3段)
- 6月19日 「声」 ハンセン病に理解を(西部1段)
- 6月30日 「救ライの母」をしのんで リデル女史 ライト女史 病者にささげた半生 焼身の気迫政府動かす 内田守(西部2段)
- 7月20日 斎藤院長ら外務大臣表彰 インドの救ライ活動で(1段)
- 7月20日 「人」 インドの救ライ事業から帰った 斎藤俊(1・5段)
- 9月14日 壱阪寺にノッポの観音様 インドから石材、55年完成(大阪3段)
- 9月24日 (死亡記事)志賀一親氏 国立療養所菊池恵楓園長(夕刊1段)
- 9月24日 救ライ一筋に尽くす 悲しみに沈む患者ら 楽しみにしていた保健文化賞授賞式 急死した志賀園長(熊本版横4段)
- 9月29日 「今日の問題」 救ライの道(1段)

1977年(昭和52年)

- 3月20日 「軌跡」 アジア救ライ協会 インドに消えぬ灯(横1・5段)
- 5月18日 ふれあいの心永遠に 国立療養所長島愛生園 記念碑、あす除幕 楽団「青い鳥」と後援者(岡山版横4段)
- 6月25日 凍り続ける歳月 | ハンセン病の軌跡 国立療養所「大島青松園」から 結婚・就職 強い拒否 いまも冷たい世間の目(四国版横3段)
- 6月25日 皇太子ご夫妻がおつくりの歌披露 ライを理解する集い(夕刊1段)
- 9月4日 ハンセン病患者診察 香川県立中央病院 公機関で初(大阪横3段)
- 11月10日 パラグアイの「シュバイツァー」印南聖司さん ハンセン病根治に生涯かけ(夕刊3段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

1978年（昭和53年）

- 3月14日 「今日の問題」 社会復帰（1段）
- 4月2日 救ライ半世紀 高島さん 長島愛生園去る（大阪 5段）
- 8月4日 「ハンセン病の軌跡」が本に 朝日新聞香川版に連載 差別と偏見打破 患者・家族側に立って（四国版 4段）

1979年（昭和54年）

- 2月2日 ハンセン病克服 鈴木重雄さんが自殺（2段）
- 4月1日 政府やっと本腰 ハンセン病 医者探し始める（大阪 3段）
- 4月12日 隔離で偏見だけ温存 ハンセン病は解決してない（4段）
- 6月25日 「偏見のない社会を」 らい病理解する会で訴え（大阪夕刊 3段）=西部夕刊1段
- 6月26日 ハンセン病者に「交流の家」 根強い偏見解消めざし 住み込んで啓発 10年 回復者の宿を営する 飯河四郎・梨貴夫妻（大阪夕刊横 4段）
- 6月30日 ハンセン病患者の宿の女主人 資金かせぎの職失う 「ホテル勤め困る」 まだ偏見が嘆く飯河さん（大阪夕刊 3段）
- 7月19日 「ハンセン病理解」に厳しい現実 内在する現代の差別 相次ぐ激励の話、手紙 職失った「交流の家」女主人（大阪夕刊 横 5段）
- 9月28日 かつての暗さなく 70周年迎えた多磨全生園 深まる市民との結びつき（東京版 2段）
- 11月22日 岡山・長島愛生園を 生の音楽で慰問 大阪ハンセン病協力会（大阪版 1段）
- 12月18日 韓国・ハンセン病快復者の「村」 日本の若者が“支援” 労働通し培うきずな 奈良で交流ぶり展示の催し（大阪 横 3段）

1980年（昭和55年）

- 3月15日 朝日福祉賞の上原医師 琉球舞踊で祝福 沖縄の患者ら（夕刊 3段）
- 4月13日 療養生活にめげず 初の絵画展 菊池恵楓園の絵画グループ 人目ひく 80号の大作 「生きがい」と夢中で取り組む（熊本版 3段）
- 5月9日 若者ら肩組み交流 天理 ハンセン病患者里帰り（大阪夕刊 2段）
- 5月14日 ハンセン病 菌が体に入っても発病まれ 国立多磨研 血清反応から調査（横 3段）
- 6月25日 ハンセン病患者 | 診察します | 宇治の曽根病院 差別に憤り感じ 全国で初めての“宣言”（大阪夕刊 3段）
- 7月13日 ハンセン病に光（西部 1段）
- 8月8日 ハンセン病回復者と働こう 若者37人、韓国へ出発（大阪 3段）
- 9月7日 ハンセン病の治療研究一筋 難波さんに保健文化賞（1段）
- 9月22日 「自由席」 自費でハンセン病映画製作（2段）
- 9月25日 ハンセン病強制隔離に償いを 無菌の元患者を診察 差別と誤解に闘う姿勢 京都・曽根病院 曽根久郎さん 合併症治療は当然 社会復帰にほしい理解（夕刊 4段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 10月 2日 本土 療養所に橋を 瀬戸内のハンセン病患者陳情 厚相、早期の実現約束(大阪 夕刊 横3段)
- 10月13日 「ひとこと」 神話が残るハンセン病 = M・ルシャ氏(夕刊 1段)
- 10月23日 国に啓発の動き鈍く 医師不足、機器も旧式 誤解とけぬハンセン病(大阪 4段)
1981年(昭和56年)
- 2月12日 「人間として扱え」 叫び続けた50年史 ハンセン病患者の労作(大阪 2段)
- 5月 8日 ハンセン病の終生 歌曲に 離れ島に散った患者の詩 哀悼の作曲きょう上演(大阪 3段)
- 5月15日 「らい予防法」改正を討議へ 全患協 「時代遅れ 差別の根拠」「最後」の闘い、曲折も(大阪 3段)
- 7月 2日 痛み分かち合い ハンセン患者と在日朝鮮人 詩と写真集を合作 生きて自ら光芒を(4段)
- 7月18日 「ひととき」 ハンセン病おじさんの尊さ(囲み2段)
- 7月25日 「町へ出たい」実った陶芸展 市民に成果披露する200点 多磨全生園(東京版 2・5段)
- 11月11日 「子は難病…」無理心中図る シラクモをもしやハンセン病… 母親が2児絞殺 秋田 死にきれず出頭 子宮内感染も遺伝性も否定 = ハンセン病(夕刊 4段)
- 11月21日 ハンセン病療養所で奉仕20年 関学大生汗の触れ合い出版 自分の生きざまも問い直す 23日に40人招いて交流(大阪夕刊 4段)
- 12月 6日 きょう京都で開催 ハンセン病を語る集い(大阪 1段)
- 12月26日 ハンセン病患者の悲願10年 「人間回復の橋」に予算 瀬戸内海の長島(横3段)
- 12月27日 救ライ協が近く解散(1段)
1982年(昭和57年)
- 2月 7日 ハンセン病 誤解やめて お坊さんが自費出版、訴える 社会復帰阻む差別・偏見(東京版 横3段)
- 3月16日 「ハンセン病へ誤解助長」 作家栗本薫さん謝罪 SF小説に抗議受けて(2段)
- 6月25日 陛下お迎えし式典 ハンセン病救済の藤楓協会三十周年(夕刊 1段)
1983年(昭和58年)
- 2月 9日 あるハンセン病患者の記録 『面会』相模二郎・談 偏見と差別に隔離されて25年 やっと抱けた孫 娘は夫にも秘密のまま 完全制圧は近い 偏見ただせ(夕刊 5段)
- 4月 7日 「モンスーン ビルマ・人と心」 減らないハンセン病(囲み3段)
- 4月13日 曾野さんに神父賞(1段)
- 5月 2日 同病者に友情の寄金(1段)
- 5月 8日 定期支部長会開く ハンセン氏病患者協(大阪 1段)
- 5月16日 祖国へ交流の旅 ハンセン病の在日韓国人患者 隔離から約半世紀 日本キリスト

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 教・救癩協会計画 9月上旬に出発（夕刊 4段）
- 6月22日 岡山・長島架橋ルート決まる 63年度完成の予定（大阪 1段）
- 6月24日 アジアのハンセン病患者救済 民間基金あす発足 高槻の歯科医ら尽力（大阪夕刊 3段）
- 8月28日 「天声人語」=韓国回復者村キャンプでの日韓学生の汗（囲み 1段）
- 9月 7日 女高生の募金実り韓国に老人ホーム ハンセン病（夕刊 3段）
- 9月19日 自立の拠点 顔いきいき 韓国ハンセン病患者の「定着村」 家族と共に働く喜び「想像より高い生活水準」（4段）
- 11月 5日 「自由席」 胸に刻む“コロンブスの卵”（夕刊 1段）
- 11月15日 韓国ハンセン病回復者 奉仕活動の青年が報告展 共に生活し良き仲間 交流で消えた偏見 村人の様子 写真で訴え、呼びかけ（囲み 4段）
- 12月14日 韓国のハンセン病回復者村の写真展 あすから大阪・生野で（大阪 1段）
1984年（昭和59年）
- 5月 9日 司法修習生、ハンセン病施設へ 岡山 見学し懇談、患者ら歓迎（大阪 3段）
- 6月21日 詩の遺稿に 25年ぶり光 ハンセン病患者が残したノート ボランティア 発掘し出版（大阪 2段）
- 6月24日 「現代社会」 偏見改め人権への配慮必要 もはや不治ではないハンセン病（3段相当）
- 6月24日 正しい理解へ法改廃を討議 ハンセン病患者団体（大阪 1段）
- 6月24日 ハンセン病基金にハンカチ作りで寄付 天王寺の沢崎さん 他人事とは思えず 夜なべ続けて（大阪 3段）
- 7月 7日 療養所に広がる森 多磨全生園 患者が植林、市民も協力 園が使命終わる日に備え（夕刊 3段）
- 7月30日 日韓の心結ぶ勤労奉仕 「ハンセン村」50人あす出発（大阪 4段）
- 8月10日 「ひと」 韓国の「定着村」でワークキャンプ生活をしている 柳川義雄さん（大阪 囲み 1段）
- 8月14日 「こころ」 湯浅洋さんに聞く 「救らい」西独に学ぼう 患者ゼロ、援助は巨額 途上国と痛みを分かち（3段）
- 12月27日 “人間回復の橋”やっと 来年度の着工決定 瀬戸内・長島のハンセン病施設 患者長年の悲願 社会と交流の一助（夕刊 5段）
1985年（昭和60年）
- 1月19日 ハンセン病研究の西占貢氏が客死（1段）
- 1月24日 ハンセン病の救済一筋 高島重孝氏死去（2段）
- 1月27日 「天声人語」=高島氏のことども
- 5月20日 結核・らい菌遺伝子分離 ワクチンづくりに道（大阪夕刊 3段）
- 8月22日 「論壇」 「らい予防法」の抜本改正を 常識にも医療の実情にもそぐわぬ 三輪照峰（世界ハンセン病友の会代表）（囲み 3段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 8月24日 ハンセン病療養所でふれあいキャンプ 沖縄愛楽園へ子ら 30人訪問 「いたわり」の大切さ学ぶ 戦争の悲惨さを教わり ゲートボールも楽しむ(大阪 4段)
- 12月16日 偏見くずす橋着工 岡山・長島 ハンセン病患者ら 50年の悲願 隔離の歴史返上へ 62年度完成 厚相らくわ入れ(大阪夕刊 横4段) = 東京は17日朝刊で「"人間回復の橋"待望の着工」として3段。
1986年(昭和61年)
- 1月5日 朝日社会福祉賞 「日本キリスト教救癩協会」理事 林富美子さん 疎外患者に注ぐ愛 ハンセン病や老人ホームで(4段)
- 1月30日 役に立てる日本の技術 ハンセン病補装具づくり 中国の2青年 研修終え帰国(夕刊 4段)
- 3月4日 ハンセン病回復者交流の家 関西の若者ら韓国で建設(大阪夕刊 横3段)
- 3月18日 ハンセン病への偏見・差別 「なぜいまも」の思い込め 元患者の納骨堂を再建 多磨全生園(多摩版 3段)
- 6月11日 薬害のためにめしひし君あはれ 高松宮妃殿下から歌のお返し ハンセン病患者へ 自費出版の歌集に感動(5段)
- 9月23日 「天声人語」= 韓国の定着村
- 10月5日 フィリピン ハンセン病の村 この現状を知って サリドマイド障害の荒井貴さん訪問 粗末な施設・医療・環境 家族の自立への援助も (3段)
- 10月8日 救ライ活動の功績に再び光 故小川正子さん生誕の春日居町 高まる記念館建設 国体視察の寛仁殿下13日、遺品ご覧に(山梨版 4段)
1987年(昭和62年)
- 2月3日 高松宮さまご死去 午後、肺がんのため 82歳 昨夏以来ご療養 陛下 お見舞いの直後 多方面にご活躍 ハンセン病にもご理解(夕刊 5段)
- 2月7日 全国のハンセン病患者から弔電続々 = 高松宮(1段)
- 3月4日 長島愛生園の高校「新良田教室」最後の卒業生送り、閉校(大阪 3段)
- 3月30日 「天声人語」= 在日韓国・朝鮮人の元患者
- 4月10日 ハンセン病撲滅活動の医師支援 ペシャワール会 映画と公演の会(福岡版 横3段)
- 4月18日 「ひと」 ハンセン病の在日韓国・朝鮮人を描いた「名ぐはし島の詩」を著した喜田清さん(大阪 囲み1段)
- 5月9日 「不惑の憲法」 二つの予防法 人権より社会を優先(2段)
- 5月14日 (医療)ハンセン病ワクチン10年内にできる公算(大阪夕刊 1段)
- 7月4日 「こころ」 ハンセン病の「好善社」 受けた援助、今度はお返し タイの施設へ奉仕活動 給水設備贈り根絶めざす(4段)
- 7月18日 ハンセン病治療 バングラで苦闘 尼崎出身の畑野医師 すでに三千人診察(大阪横 1・5段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 8月24日 在日ハンセン病患者の生活史 隔離された韓国・朝鮮人の証言出版 民族や病を責められる理不尽さ（3段）
- 10月 9日 ハンセン病の島へ橋（1段）
- 12月 4日 「今日の問題」 人間回復の橋（1段）
- 12月 5日 「ハンセン病に会員不安」 ゲートボールから 療養所のチーム 群馬の協会（夕刊横3段）
- 12月18日 本土結ぶ橋にゲート ハンセン病岡山の施設 「また隔離」患者反発（夕刊 4段）
- 12月21日 「愛の懸け橋」になぜゲート 長島のハンセン病療養施設 「新たな隔離」患者ら反発 国の建設工事中断（夕刊 4段）
- 12月25日 ゲート撤去申し入れ ハンセン病患者協（大阪 1段）
1988年（昭和63年）
- 1月13日 厚生省、代案示す 「愛の懸け橋」ゲート（1段）
- 2月14日 ハンセン病と闘う患者たち（日曜版 1段）
- 2月27日 愛の架け橋 開通、「門」で足踏み 岡山・長島のハンセン病国立療養所 患者側 「代案も自由を規制」 厚生省「外部者による環境破壊心配」（大阪 4段）
- 3月31日 監視ゲート撤去し 愛の架け橋開通へ（大阪 1段）
- 4月28日 ハンセン病に尽くす = 佐々木神父（1段）
- 5月 9日 人間回復への悲願「愛の架け橋」開通 瀬戸内・長島と本土結ぶ（大阪夕刊 3段） = 東京は『愛の懸け橋』が開通」として夕刊1段。
- 8月 6日 全国のハンセン病患者が歌集 耐えた苦しみ あふれる真情 「立派な人生」のあかし 故人含め253人の1万首（4段） = 大阪は9月2日に夕刊4段で
- 8月14日 韓日中 平和のかけ橋確か ハンセン病元患者の施設 学生らが「交流の家」 終戦記念日に合わせ 完成祝う式典（3段）
- 9月15日 ハンセン病患者の店 高齢化で閉店 50年余独力で運営 岡山 入所者減り 後継者不足（大阪 3段）
- 10月15日 ハンセン病の詩人の闘い活字に（夕刊 3段）
- 10月18日 「らい予防法」改正求め運動（大阪 1段）
1989年（平成1年）
- 1月 5日 朝日社会福祉賞 弱者への愛一筋 沖縄県ハンセン病予防協会理事長 犀川一夫さん 沖縄のハンセン病治療、予防、啓発に尽くした 偏見除く在宅治療推進（4段）
- 1月19日 全共闘世代の心意気再び 20余年前ハンセン病患者の宿建てた仲間管理人夫妻に隠居の家贈る（大阪夕刊 横3段）
- 5月12日 暗から明への歩み... 75歳、ハンセン病を歌う 斎木創さん歌集を刊行（3段）
- 6月13日 在日ハンセン病患者苦難の証言 翻訳し母国で出版 韓国人留学（大阪夕刊 4段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 7月18日 比のハンセン病患者に光 日本人の医師夫妻 3年間の努力実る 手弁当で治療に没頭 アキノ大統領も対策に本腰 「隠れた患者」の説得が課題（横4段相当）
- 9月26日 ハンセン病は癒えても... 社会復帰に苦闘の記録 画廊主らの協力で出版（大阪 横2段）
- 11月 2日 ハンセン病患者の島 本土と結び路線バス（大阪 囲み1・5段）
- 12月 4日 ローマ法王ハンセン病患者と接見 岡山など4県の一行1人ひとりと握手 苦しみの体験 世界平和にささげて（大阪 横4段）
1990年（平成2年）
- 7月31日 ハンセン病患者ら決起 高齢化し「最後の闘い」 今なお「法で隔離」改正を...10月に議員要請 「国は啓発も不十分」 “声の面会”も果たせず（大阪夕刊 4段）
- 6月14日 「論壇」 偏見生む「らい予防法」は廃止を 通院入院可能なのに追いつく病院も 牧野正直 = 大阪府立公衆衛生研究所微生物課長（3段）
- 11月18日 「社説」 「らい予防法」改正は当然だ
- 12月 8日 「窓」 島の療養所から

【読売新聞】

- 1976年（昭和51年）
- 9月28日 ライ患者の光となって 神山復生園の井深八重さん（79歳） 偏見と闘った半世紀 青春も結婚も捨て（7段）
1978年（昭和53年）
- 4月 2日 医は仁術 長島愛生園の高島さん退官（6段）
1980年（昭和55年）
- 10月 2日 本土架橋、厚相に直訴 ハンセン病患者たち（3段）
- 10月18日 ハンセン病 夭折の作家北條民雄 川端康成が激励の手紙（7段相当）
1981年（昭和56年）
- 9月 9日 ハンセン病-69年の生涯 辛酸の日々 一本の指で（7段）
- 12月27日 アジア救ライ協が活動に幕（1段）
1984年（昭和59年）
- 3月30日 ハンセン病撲滅一筋 那須皓さん死去（4段）
1985年（昭和60年）
- 1月19日 救ライの西占氏、インドで死去（4段）
- 7月29日 中国のハンセン病患者、大幅に減る（1段）
- 12月16日 ハンセン病長島療養所 「小島の春」に架橋 入園者ら待望の起工式（4段）
- 12月23日 読者から らい病の現状を教えて 減少傾向、年30-50人 空気感染、遺伝は迷信（4段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1987年(昭和62年)

7月16日 ハンセン病患者施設ご視察 浩宮さま(2段)

8月12日 皇太子ご夫妻 ハンセン病施設ご慰問(2段)

1988年(昭和63年)

4月13日 顔「タラ救らい会」を推進する司祭(6段)

5月9日 “療養の島”に念願の橋 ハンセン病患者の訴え実る 「人間性回復の証明」(4段)

5月11日 よみうり寸評(囲い込み=4相当)

1989年(平成元年)

5月19日 ハンセン病にささげた一生 井深八重さん 92歳の天寿(囲い込み=4段相当)

【毎日新聞】

1986年(昭和61年)

12月9日 ハンセン病ワクチン開発成功 WHO 治療から予防に(朝刊3段)

1987年(昭和62年)

5月25日 浩宮さまピアノ独奏 チャリティーで(朝刊2段)

9月5日 土曜プリズム 女なんどき 三重苦の同胞を聞き書き4年間 在日朝鮮人主婦・蘇福姫さん(朝刊特集3段)

1988年(昭和63年)

5月9日 余録・長島大橋(朝刊2段)

5月9日 悲願半世紀「人間性回復の橋」 ハンセン病患者ら万感胸に渡り初め(夕刊・囲い・写真)

5. 1991年から1996年末まで

【朝日新聞】

1991年(平成3年)

3月27日 45人参加し沖縄でふれあいキャンプ(西部1段)

4月15日 島の療養所の夏 歌になった 元ハンセン病患者 塔和子さんの詩 柳川直則さんが曲をつけて発表へ(3段)

4月18日 「らい予防法」改正を(夕刊1段)

6月27日 「人間回復を願っているのです」 法改正求めるハンセン病患者 今も続く隔離政策 社会防衛思想問う(大阪夕刊4段)

7月9日 「なんでもQA」 ハンセン病・上 「ゼロへの道」 薬と食生活改善で激減 今も消えない隔離の傷(横4段)

7月10日 同上 ハンセン病・中 「隔離政策」 弱かった人権守る世論 強制収容された例も(横4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 7月11日 同上 ハンセン病・下 「根強い偏見」 取り締まり色残す予防法 まず深めたい正しい理解(横4段)
- 7月24日 「現代人物誌」 藤楓協会理事長 大谷藤郎さん ハンセン病資料館にかける(夕刊 3段)
- 8月13日 元兵士44年後の「心の平和」 引き揚げ途中“置き去り” 元上官の説明で和解(大阪夕刊 横2段)
- 10月16日 患者の悲しみつづる(大阪夕刊 1段)
- 11月26日 ハンセン病患者ら聖地巡礼終える(大阪 1段)
1992年(平成4年)
- 1月23日 患者抑圧の歴史再現へ 構想進むハンセン病資料館 東京・多磨全生園内に予定
長年、偏見と強制隔離 文献・写真・生活用具... 展示で正しい理解訴え(夕刊 4段)
- 2月 1日 戦争が分断、香川のハンセン病患者 51年ぶり弟に会えた ハワイの市民、探しあてる(大阪 3段)
- 2月10日 ハンセン病撲滅4000人に試験治療 WHO(夕刊 1段)
- 4月 9日 法律改正求め特別委を設置 ハンセン病患者協(大阪夕刊 1段)
- 4月24日 中・高生 沖縄ハンセン病療養所へ交流の旅 入園者とふれあい深め 「基地の島」で平和学ぶ(大阪 4段)
- 5月26日 1900柱の魂 風に乗り空へ ハンセン病療養所の島 100トンの石で記念碑(大阪 3段)
- 8月15日 ハンセン病患者優しく迎えた 四国に母娘遍路像計画 差別と偏見なき世願い友の会、支援呼びかけ(大阪 4段)
- 12月 2日 正面衝突6人死亡 ハンセン病療養者載せたワゴン 岡山 暴走トラックと(大阪夕刊 横5段)
1993年(平成5年)
- 1月25日 沖縄ふれあいキャンプ募集(大阪夕刊 1段)
- 2月28日 「母娘遍路像」善通寺に建立 ハンセン病友の会願い通じる 来月から制作へ(大阪 3段)
- 5月 7日 「論壇」 ハンセン病研究と国際貢献 和泉真蔵=国立多摩研究所生体防御部長(3段)
- 11月28日 ハンセン病差別撤廃の遍路像 「傷あと残る」と移設 四国から来月東京へ(3段)
1994年(平成6年)
- 1月21日 ハンセン病「母娘遍路像」 四国から移設 東村山で開眼式(1段)
- 4月21日 「らい予防法」廃止を要求へ 患者団体が方針転換(夕刊 1段)=この記事は誤報(勇み足)として、取り消しに
- 8月23日 発病しやすさ識別が簡単に ハンセン病の研究報告(1段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 10月12日 ハンセン病患者の立場から法改正を 15日に金田町で集会(筑豊版 2段)
- 10月19日 「すくらんぶる」 医療進歩 治る病に「差別生む隔離、廃止を」 らい予防法と闘う(筑豊版 4段)
- 11月 9日 らい予防法 廃止要求 療養所の所長連盟 「社会復帰へ新法を」(3段)
1995年(平成7年)
- 1月25日 福祉保障など要求へ らい予防法改正で患者ら(2段)
- 1月26日 「ひと」 国立療養所多磨全生園園長 村上国男さん(2段)
- 2月10日 (記者ノート)差別残すらい予防法廃止を(大阪 横2・5段)
- 4月23日 らい予防法 らい学会が廃止求める 長期黙認を反省 「根拠なく恐怖心あおった」(5段)
- 4月23日 らい学会の見解要旨 強制隔離容認の世論を意図 この誤りを再認識してこそ人々の無念さに報いられる(2段)
- 4月23日 らい学会見解 「画期的な姿勢転換」 全患協会見 新法整備求める意見も(3段)
=大阪本社は「らい学会の『転換』評価」として4段。他に《解説》「法廃止へ流れ決定的に」3段も。
- 5月10日 「社説」 らい予防法をなくしたあとに(2段)
- 5月13日 らい予防法廃止の方向 厚生省 生活維持へ新法(4段)
- 5月16日 「文化」 らい予防法廃止求める学会見解 先覚者二人の功績思う 理解と愛情持ち隔離に反対 島比呂志(3段)
- 5月17日 「ひと」 多磨全生園名誉園長 成田稔さん(2段)
- 5月25日 「らい予防法」ようやく来年廃止へ 偏見助長した厚生省と学会 薬普及、ほとんど完治 政策転換の好機を逃す 正式に保険診療認める必要 大谷藤郎・藤楓協会理事長に聞く 知ってほしい患者受難の歴史(4段)
- 5月31日 ハンセン病 克服へ残る研究課題 培養難しく、アルマジロ頼み 感染源、自然界にも可能性 WHO2000年までの制圧めざす(夕刊 4段)
- 6月19日 ハンセン病の老歌人 あこがれのSLで旅 遺言代わりに歌集出版へ 高齢の機関車SLと呼びかへて力ふりしぼりレッツゴーゴー(大阪 4段)
- 6月23日 「らい予防法」などを話し合うフォーラム 25日、多磨全生園で(大阪夕刊 1段)
- 6月25日 ハンセン病を語る(1段)
- 7月 4日 らい予防法見直しを検討(1段)
- 8月28日 廃止される「らい予防法」 関連法での差別なお 優生保護法・国民健康保険法 3段)
- 11月25日 厚生省素案に患者団体反発 らい予防法見直し(1段)
- 11月27日 ルポ ハンセン病「隔離」の88年 「らい予防法」廃止へ 「納骨堂」 死後なお故郷に戻れず(夕刊 横4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 11月28日 同上 2 「医療刑務所」 空室続く偏見の遺物(同上)
- 11月29日 同上 3 「学会の沈黙」 生き続けた優生思想(同上)
- 11月30日 同上 4 「患者組織」 世界に眼が向かない日本(同上)
- 12月 9日 らい予防法廃止に 通常国会に法案提出へ 厚生省の検討会が報告書 厚相が反省表明へ(4段)
- 12月 9日 《解説》 らい予防法 責任回避図る厚生省 矛盾放置し差別を助長(3段) 国は国会で謝罪を = 高瀬重二郎・全患協会長(1段)
- 12月 9日 国の責任問う声強く らい予防法廃止の報告 偏見克服策も要求(西部 4段)
- 12月19日 「コラム私の見方」 らい予防法への反省示せ(横3段相当)
- 12月26日 (死亡記事)ハンセン病の語り部 伊奈教勝氏(1段)
1996年(平成8年)
- 1月18日 厚相、らい予防法放置を謝罪 患者団体に「苦痛与えた」(4段)
- 1月23日 らい予防法廃止へ答申(1段)
- 2月 2日 らい予防法放置で謝罪(1段)
- 2月 6日 「論壇」 らい予防法の落とし穴 島比呂志(3段)
- 2月17日 「隔離からの解放」明快に訴え ハンセン病の語り部 伊奈教勝さんを悼む 岡部伊都子(大阪夕刊 3段)
- 2月20日 ハンセン病差別の歴史を検証 K A B製作ドキュメンタリー 24日午後に放映「無知・無関心排し正しい理解を」(熊本版 3段)
- 3月20日 ハンセン病患者に「補償と謝罪を」 九州弁護士連が声明(西部 1段)
- 3月26日 らい予防法廃止法案 衆院厚生委で可決(大阪 1段)
- 3月27日 らい予防法廃止法成立 「隔離」の根拠に終止符(夕刊 4段)
- 3月28日 「予防法放置 行政の怠慢」 全患協が声明(1段)
- 4月 6日 「ハンセン病患者隔離助長」 真宗大谷派が謝罪声明(夕刊 3段)
- 4月 8日 「ひと」 統合、尊厳、経済向上をはかる国際協会(I D E A)代表 P・K・ゴパールさん(囲み1段)
- 4月14日 「らい予防法廃止 遅かった」 菅厚相、療養所で謝罪(3段)
- 4月26日 らい病の名前をハンセン病に変更 学会名も(1段)
- 5月 4日 「ひと」 全国ハンセン病患者協議会事務局長 神美知宏さん(囲み1段)
- 6月 6日 ハンセン病の実態映画化 患者の証言記録 東村山の団体など企(東京版 3段)
- 6月 9日 らい予防法は廃止されたが...大島青松園からの報告 入所者の多くが高齢化 社会復帰への課題山積 国に人権侵害の責任あり = 島比呂志さん(大阪 5段)
- 6月19日 ハンセン病施設在園者は訴える 失った時は重すぎるが少しでも交流広げたい なお残る差別と偏見 九州・沖縄の5園 九弁連アンケート(西部 4段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 8月29日 過去のハンセン病隔離 鳥取知事が遺憾の意 岡山の療養所(大阪 4段)=東京は1段
- 9月20日 ハンセン病患者の「生の声」が好評 ブックレット「病みすてられた人々」増刷(3段)
- 10月 2日 人権回復求め実名の訴え 元ハンセン病患者 過去と縁切り仮名で過ごした半生 「差別される恐怖 克服して」=森元さん夫妻(3段)
- 10月24日 「ひと」 ハンセン病の心を描く 趙昌源さん(囲み 1段)
- 11月26日 ハンセン病への偏見なお 手術拒否や「禁足令」 法廃止の意味周知を(4段)

【読売新聞】

- 1991年(平成3年)
- 8月17日 「ハンセン病資料館」建設へ(2段)
- 1995年(平成7年)
- 5月13日 「強制隔離必要なし」 ハンセン病検討会 法廃止へ中間報告(5段)
- 7月 4日 らい予防法見直し検討会(1段)
- 8月10日 顔「らい予防法」の見直しを訴える平沢保治さん(4段)
- 11月11日 群馬のハンセン病施設 ゲートボール“偏見の門” 9年間締め出し 県協会に再加盟求める(4段)
- 12月 9日 88年間 強制隔離の歴史に幕 「らい予防法」廃止 見直し検討会 国の対応遅れ 批判(5段)
- 12月14日 社説 らい予防法の愚を繰り返すな(4段)

1996年(平成8年)

- 3月28日 「らい予防法」廃止 隔離の歴史に幕(2段)
- 4月14日 らい予防法の遅れ 厚相、入園者に謝罪(5段)
- 4月26日 「ハンセン病学会」に改名(1段)
- 6月 3日 「ハンセン病」描写で日本テレビに抗議(2段)

【毎日新聞】

- 1991年(平成3年)
- 8月17日 ハンセン病患者の歴史知って 資料館建設へ募金運動(朝刊7段)
- 1992年(平成4年)
- 2月 5日 1カ月服用で治療 ハンセン病特效薬 WHOが臨床試験(夕刊3段)
- 11月 1日 在日韓国・朝鮮ハンセン病患者 里帰りに“偏見の壁” 祖国のホテル「宿泊拒否」(大阪朝刊3段・ヨコ見出し)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1994年(平成6年)

- 5月14日 ハンセン病 「強制隔離は人権侵害」 厚生省委託検討委員長が新法求める(朝刊・ヨコ見出し・写真)
- 5月14日 「差別の歴史」と闘い 療養所でハンセン病患者ら 「日の丸の汚点」と言われ(朝刊3段)
- 5月19日 「らい学会」も現行法検討 ハンセン病患者隔離 来年4月に公式見解(朝刊3段)
- 11月9日 らい予防法廃止を 「差別と偏見生んだ原因」 療養所所長連盟決議(朝刊7段)

1995年(平成7年)

- 2月5日 ひと・患者代表としてらい予防法廃止に取り組んだ高瀬重二郎さん(朝刊2段・写真)
- 4月24日 「らい予防法」らい学会も廃止求める統一見解(朝刊ベタ・ヨコ見出し)
- 5月13日 「らい予防法」廃止へ 厚生省検討会が報告書 “終生隔離”政策89年目(朝刊3段)
- 5月13日 解説・差別黙視の歴史反省を 絶望越え勝ち取った保障(朝刊4段)
- 12月1日 多磨全生園ルポ 患者に差別のツケ重く 謝った認識助長し社会的生命奪った今ごろ法律がなくなっても、ここにいるしかない(夕刊・特集面・ヨコ見出し)
- 12月9日 「らい予防法」廃止を提言 国の対応遅れ批判 厚生省研究会(朝刊2段・ヨコ見出し)
- 12月9日 解説・「見直しの遅れ」認めだが 厚生省は責任明確化を(朝刊2段)
- 12月14日 社説・ハンセン病 病める社会が病気を作る(朝刊5段)

1996年(平成8年)

- 1月18日 ハンセン病患者に厚相が謝罪 「らい予防法」見直し遅れ(夕刊3段)
- 1月23日 らい予防法廃止法案答申 厚生省公衆衛生審(朝刊2段)
- 2月1日 偏見の闘い地域から ハンセン病施設の李さん 住民との交流、本に 多磨全生園(夕刊4段・写真)
- 3月8日 ハンセン病の治療薬3種 「希少疾病薬」に指定へ 薬事審答申(朝刊4段)
- 4月27日 日本らい学会が病名を『ハンセン病』に改称(朝刊ベタ)
- 8月27日 「らい予防法の廃止を考える」九弁連出版 九州の5園アンケート調査ハンセン病差別、在園者330人が告発(西部朝刊3段・ヨコ見出し)
- 12月2日 ハンセン病強制隔離の過去“反省” 鳥取県 県出身患者を「陰・夢博」に招待へ(西部朝刊7段)
- 12月16日 この人と らい予防法、記録に 映画監督・中山節夫さん(夕刊・囲い・ヨコ見出し)
- 12月17日 この人と らい予防法、記録に 映画監督・中山節夫さん(夕刊・囲い・ヨコ見出し)
- 12月18日 この人と らい予防法、記録に 映画監督・中山節夫さん(夕刊・囲い・ヨコ見出し)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

12月19日 この人とらい予防法、記録に 映画監督・中山節夫さん (夕刊・囲い・ヨコ見出し)

五 外国のハンセン病に対する「救ライ」事業に関する記事

1. インド「救ライ」関係の記事

【毎日新聞】(参考『毎日新聞百年史』575～576頁)

ベタ(25本) 2段(35本) 3段(26本) 4段(18本) 5段(12本)

6段(8本) 7段(10本) 8段(2本) 計137本

1961年(昭和36年)

5月18日 宮崎松記氏ら3博士インドへ 救ライの調査に(朝刊ベタ)

9月 6日 日本人の友愛でインドの救ライを 宮崎博士、帰国して訴える 病院を建てよう(朝刊6段)

1962年(昭和37年)

4月26日 インドに“小島の春”を アジア救ライ協会スタート ヒマラヤのふもとに日本の手で病院(朝刊7段)

4月26日 日本が“恩返し”の番 明治時代、外国の奉仕うける(朝刊2段・ヨコ見出し)

4月27日 30日に初の実行委 アジア救ライ協会(朝刊ベタ)

5月 1日 寄付金もぞくぞく アジア救ライ協会、近く財団法人に(朝刊3段)

5月10日 救ライにピートバンク運動 子ブタの募金 病院建設に一役(朝刊5段・囲い・ヨコ見出し・写真)

5月15日 インド大使も協力 ライ病院の建設計画に(朝刊3段)

6月 7日 高崎でも始まる 救ライ“ピートバンク”運動(朝刊(群馬版)3段)

6月10日 関西の六大学も協力を表明 インド救ライ学生運動(朝刊2段)

6月13日 日本キリスト教協議会、全日本仏教会 ライ病院建設(インド)を支援(朝刊4段相当・ヨコ見出し)

6月21日 社説・インド救ライ事業の意義(朝刊6段)

6月25日 インド救ライに寄金つづく(朝刊ベタ)

8月 3日 ライオンズ三百二地区ガバナー会議(朝刊ベタ)

8月 3日 僕らも愛の手を 救ライ募金に岡崎の中学生(朝刊2段相当)

8月 4日 インド救ライ事業に積極的な援助決める ライオンズ日本ガバナー会議(朝刊ベタ・ヨコ見出し)

8月 8日 関西に事務局設ける アジア救ライ協会(朝刊2段)

9月 2日 “救ライ募金”急ピッチ キリスト教系校も23日に大会(朝刊4段相当・ヨコ見出し)

9月 3日 時のことば・アジア救ライ協会(朝刊ベタ)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 9月11日 インドの仏教学者夫妻来日 救ライ事業推進(朝刊ベタ)
- 10月10日 21日に講演・音楽の集い インドにライ病院建設 救ライ関東学生会が協力(ベタ)
- 10月22日 全国的な統一組織めざす 救ライ関東学生会が講演会(朝刊3段)
- 11月7日 インド救ライ病院の建設を促進 西村厚相語る(朝刊ベタ)
- 11月8日 興行収入をアジア救ライに 大谷楽苑が宗教歌劇上演で(朝刊ベタ・写真)
- 12月8日 「アジア救ライ協会」が発足 インドに病院を 友愛の募金呼びかけ(朝刊5段・写真)
- 12月10日 救ライ協会へ百万円 全社員がボーナス抛金 オリジン電気(朝刊3段)
1963年(昭和38年)
- 1月24日 代表団、27日インドへ アジア救ライ 病院の建設具体化(朝刊3段)
- 2月2日 インド救ライに募金贈る 日本キリスト教協議会(朝刊2段)
- 2月3日 インド救ライ事業 ネール首相も共鳴 那須理事長に感謝の言葉
(朝刊3段・写真)
- 2月9日 インド救ライは幅広く 現地視察の那須理事長帰る(朝刊3段)
- 2月26日 インドの有名な廟、随一の観光地『タジマハール』の東 救ライ病院の敷地内定(5段)
- 3月7日 インドの救ライ事業 ほとんど自宅療法 いま日本の手で大病院造り(朝刊7段)
- 3月17日 インド救ライ実現に一步 5月ごろ正式調印(朝刊5段)
- 4月17日 社告・インド救ライ病院建設基金募集演奏会 アイ・ジョージとその仲間たち(朝刊2段)
- 5月15日 アイ・ジョージが慈善音楽会 インド救ライに協力(朝刊ベタ)
- 5月20日 アジア救ライに260万円 ライオンズクラブが贈る(朝刊2段)
- 5月29日 インド保健省次長が来日 救ライ病院の建設とりきめに(朝刊2段)
- 5月30日 インド救ライ病院建設 調印を終わる 来春、医療始める(朝刊6段相当・ヨコ見出し)
- 6月1日 救ライ協力を感謝 インド厚生次官補(朝刊ベタ)
- 6月1日 厚相、閣議で協力を要望 インド救ライ病院建設(朝刊ベタ)
- 6月26日 ライオンズクラブが260万円 アジア救ライへまた贈りもの(朝刊3段)
- 9月6日 救ライ視察団の壮行会 8日、インドへ出発(朝刊ベタ)
- 9月9日 ライ病院建設調査団インドへ(朝刊2段)
- 9月14日 インド救ライ病院 12月、着工の運び(朝刊3段・ヨコ見出し)
- 9月16日 インド救ライ病院の設計の見通しつく 高橋氏ら帰国へ(朝刊ベタ)
- 9月18日 インド救ライ広がる運動 財界中心に後援会 池田首相が激励(朝刊5段・写真)
- 11月16日 インド救ライ・センター ネール首相も出席、定礎式(朝刊3段)
- 11月16日 実を結んだ“友愛”と“善意”インド救ライ 『日本の経験』生かし(朝刊7段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 11月19日 インド救ライ・センター いよいよ着工の運び “募金”大きな輪に
(西部4段・ヨコ見出し)
- 12月2日 インド救ライ募金 “愛のこだま”全国にすでに数百万人(朝刊5段・ヨコ見出し)
- 12月5日 15日に起工式 インド救ライ病院(朝刊ベタ)
- 12月8日 ネール首相ら迎え定礎式 15日 インド・アグラのライ病院(朝刊3段)
- 12月12日 講演純益を救ライに ドクター劇団『さんし座』が贈る(朝刊2段)
- 12月20日 “感謝”で埋まる会場 インド救ライ・センター定礎式 宮崎博士の話
(朝刊4段)
- 1964年(昭和39年)
- 5月10日 治療活動始まる インド救ライ 手を合わせて 宮崎博士にすぎる患者(朝刊7段相当・写真)
- 5月18日 インド救ライ・センター 着工待つばかり 来年十月に落成式 政府事業なみに(朝刊7段)
- 6月26日 「ライから人類を守ろう」雨の街頭で募金 アジア救ライの学生二百人(朝刊2段)
- 10月27日 インド救ライ慈善公演(ベタ)
- 10月29日 インド救ライに寄金 歌舞伎座で慈善公演 4妃殿下ご出席(朝刊4段・写真)
- 11月15日 インド救ライ・センターで労力奉仕 学生五人があず出発(朝刊ベタ)
- 11月20日 高校生400万人が募金 インドの救ライ・センター建設(朝刊4段相当・写真)
- 11月25日 インド救ライ基金に 国際婦人協会260万円贈る(朝刊3段・写真)
- 12月17日 全国高校生のインド救ライ募金 140万円超す(朝刊4段・写真)
- 1965年(昭和40年)
- 3月20日 6月から巡回診療 宿舎完成、本館は11月に インド救ライ・センター
(朝刊5段)
- 3月23日 “救ライ”のためインド永住 宮崎松記博士が決意 家族ぐるみで5月出発(朝刊4段)
- 4月26日 余生をインドの救ライに 74歳の岩本博士(仙台) アジアセンターで女房役(朝刊6段・写真)
- 5月26日 インド救ライ 中学生からも募金 医療班の派遣で呼びかけ(朝刊2段・ヨコ見出し)
- 6月20日 「救ライセンター建設に全力」インドの保健相が打ち合わせに来日(朝刊2段)
- 6月7日 救ライに300万円 在日インド人が宮崎博士に託す(朝刊2段)
- 7月20日 日本の善意 インド救ライ 医療団27日に出発 医療団、27日に出発 秋にセンター完成 救ライのキャンペーン(朝刊8段・写真)
- 7月28日 インド救ライへ出発(朝刊2段・ヨコ見出し)
- 7月28日 宮崎博士ら一行がニューデリー到着 救ライ医療団(朝刊ベタ)
- 9月12日 戦火よそに救ライ一筋 宮崎博士らインドの1カ月(朝刊4段)
- 10月7日 救ライ診療車に感嘆 インド保健相、宮崎博士らねぎらう(朝刊ベタ)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 10月15日 ひたむきな日本人医療団 インドで救ライ奉仕にはげむ 患者たちに深い信頼(朝刊3段・ヨコ見出し)
- 11月 4日 根をおろすインド救ライ 巡回者で治療に 家財道具かついだ患者も(朝刊7段・写真)
- 11月28日 読者と記者の間 着々進んでいるインドの救ライ運動 各地から患者の列(朝刊2段・ヨコ見出し)
- 12月18日 インド救ライ第二陣、29日に出発 “ホトケの院長”ら3人(朝刊7段)
- 12月 9日 宮城県民が200万円を贈る インド救ライ参加の岩本博士に(朝刊2段)
- 12月30日 岩本博士ら第二陣が出発 インド救ライに余生を(朝刊3段)
1966年(昭和41年)
- 1月17日 インド救ライ活動ひろがる 岩本博士が初の治療(朝刊2段・ヨコ見出し)
- 1月24日 長谷川理事インドへ 救ライセンター 仮開所式に出席(朝刊ベタ)
- 1月31日 救ライ・センター開く インドの感謝集める医療団(朝刊2段相当・ヨコ見出し・写真)
- 2月 4日 ガンジー首相も期待 長谷川救ライ協会理事が帰る(朝刊3段)
- 2月24日 感謝される医療団 インド救ライ、現地視察の報告会(朝刊2段)
- 3月14日 インド救ライに愛の手を 立正大自動車部が募金ドライブ(朝刊3段)
- 4月10日 余録・宮崎救ライ団に拍手(朝刊2段)
- 4月11日 救ライ訴え五千キロ 立正大の14人が帰京(朝刊2段)
- 4月24日 救ライに積もる善意 老住職が「一日一円運動」檀家こぞって協力(朝刊4段)
- 5月17日 中、高校生の善意たたえ日本学生記念研究室 インド救ライセンター(朝刊2段)
- 5月31日 救ライ・センターに援助を 那須理事長が要望(朝刊ベタ)
- 6月 6日 那須理事長、インドへ出発 台東区民の見舞い持って(朝刊2段)
- 7月15日 救ライ・キャラバン出発 学生が夏休み利用して(朝刊2段)
- 7月18日 インドセンター飾る 田中画伯の大作『ガンジス川の岸』 救ライ事業のシンボルに(北海道朝刊7段相当・写真)
- 8月22日 インド救ライの2氏が赴任(朝刊ベタ)
- 9月21日 インド救ライセンターいよいよ完成 高まる地元の感謝 巡回診療に長い列(朝刊5段・ヨコ見出し)
- 11月23日 救ライの成功を祈って ガンジー像贈呈(朝刊ベタ)
1967年(昭和42年)
- 1月13日 救ライセンター開所式に代表を派遣(朝刊ベタ)
- 1月25日 アジア救ライ・センター完成 30日晴れの落成式(朝刊7段)
- 1月27日 落成式に8氏出発 インド救ライセンター(朝刊2段)
- 1月31日 インド救ライセンター 日印の友情実り落成式(朝刊5段)
- 1月31日 日本国民から浄財 国際協力の花ひらく宮崎松記院長の手記(朝刊6段・写真)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 1月31日 インドにともった人類愛の灯 救ライセンター発足 病魔の追放を誓う（朝刊3段）
- 2月 4日 インド救ライセンター まず“民間の力”で 政府も電子顕微鏡贈る（朝刊4段）
- 2月 7日 那須博士帰る 救ライセンターの開所式に出席（朝刊2段）
- 2月28日 インドと救ライ・センター（上） 彫刻家・高田博厚（朝刊8段）
- 3月 1日 インドと救ライ・センター（下） 同（朝刊4段・ヨコ見出し）
- 5月27日 立派な研究所も完成 軌道に乗るインド救ライ・センター（朝刊4段）
1968年（昭和43年）
- 3月19日 救ライの宮崎博士帰国 『医師、看護婦をスカウトに（朝刊3段・写真）
- 3月22日 炎天下、ただ黙々 インド救ライ 宮崎博士講演（朝刊2段相当）
- 3月24日 インド救ライの“足” 宮崎博士らに新しい車（朝刊2段相当）
- 5月 2日 インド救ライ 組織的に協力の意向 首相、宮崎博士に語る（夕刊2段）
- 5月 7日 インド救ライ 財界の援助を 宮崎博士が講演（朝刊2段）
- 5月10日 救ライの宮崎博士インドへ（夕刊2段）
- 7月 5日 私も救ライに余生を 開業医たんでインドへ 斎藤博士夫妻（朝刊5段・ヨコ見出し・写真）
- 7月26日 “救ライ”をこの目で 十円玉募金の中、高生訪印（朝刊4段・写真）
- 7月30日 救ライ募金の中・高校生インドへ（朝刊2段）
- 8月10日 猛暑の中、笑顔の診療に感激 インド救ライ募金の中高生 センター見学から帰る（朝刊2段）
- 8月20日 僕らの十円玉募金がこんなに役立ったの インド救ライ 若い心ゆさぶる（朝刊3段相当）
- 10月31日 インド救ライに160万円贈る 仏教連合会（朝刊ベタ）
1969年（昭和44年）
- 2月25日 会長に足立正氏選出 浅井医博をインドへ派遣（朝刊3段・写真）
- 2月29日 インド救ライ、善意の5年目 入院病舎、完成へ（夕刊4段）
- 3月12日 浅井博士らインドへ アジア救ライ（朝刊ベタ）
- 3月25日 インドの救ライ事業 近く待望の病舎 実る日本人の善意（西部朝刊6段・写真）
- 10月26日 インド救ライの宮崎博士が帰国 医師会表彰で（朝刊3段）
- 11月9日 ひと・医師会の表彰などで一時帰国した宮崎松記さん（朝刊3段・囲い・写真）
- 11月23日 インド救ライのお役に 仏教連合会が250万円寄付（朝刊2段相当）
- 12月13日 アグラ市議会が感謝決議 インド救ライの宮崎博士に（朝刊3段・写真）
1970年（昭和45年）
- 6月19日 救ライに815万円 日本ライオンズが寄付（夕刊3段・写真）
1971年（昭和46年）
- 3月19日 読者相談室 インド救ライセンター（夕刊ベタ）
- 5月20日 すでに80万人治療 インド救ライセンター あす発足5周年式典（朝刊5段・写真）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 5月22日 「インド救ライ・さらに援助を」 満5年式典 宮崎院長訴える(朝刊3段)
6月16日 余録・松崎博士の遭難(朝刊2段)
1972年(昭和47年)
6月19日 残って博士の分も センターの日本人(朝刊4段)
1973年(昭和48)年
7月29日 「宮崎博士の遺志ついで」 インド救ライセンター 西占新院長が出発(朝刊4段)
9月 6日 新理事長に上田氏選任 アジア救ライ協会(朝刊2段)
1981年(昭和56年)
12月27日 20年間、インドで奉仕して 「アジア救ライ協会」解散(6段)

2. その他

【朝日新聞、読売新聞等】 以下のリストのうち、新聞名の特定ないものが朝日新聞。

- ベタ(15本)、1.5段(3本)、2段(12本)、3段(17本)、4段(16本)、
6段(1本)、7段(1本)、囲い(1本)、計58本
1963年(昭和38年)
2月 9日 救ライ病院 秋ごろ着工 訪印の那須博士帰国(1段)
5月31日 インド救ライ事業 協定書に調印(大阪 1段)
12月16日 救ライセンター アグラで定礎式 日本国民の浄財で建設(大阪 横2段)
1965年(昭和40年)
3月20日 六月から巡回診療 インド救ライ・センター宿舎が完成、本館は11月に(4段)
5月18日 看護婦さん初名乗り ハンセン氏病救いにインドへ(大阪 3段)
6月 6日 母国の救ライに義金 在日インド人ら 渡印の宮崎博士に(大阪 1段)
7月25日 「人」 救ライ院長としてインドに行く宮崎松記(大阪 囲み1段)
7月26日 歯の治療に台湾へ 大阪歯大救ライ奉仕団 十五カ所で数百人に 十八年の実績 今夏も招かれて(大阪 4段)
12月30日 七十四歳の老医師ら四人 インド救ライ第二陣(大阪 1段)
1966年(昭和41年)
1月31日 経済使節団も出席 インドの救ライ式(大阪 1段)
1967年(昭和42年)
1月31日 アジア救ライ協会インドセンター開所 タジ・マハール近くに人類愛の殿堂 治療と研究に威力 日印親善に生きる浄財(大阪 4段)
4月26日 慈父救ライに死す インドに病舎建設へ奔走 宮崎博士と固い約束(大阪4段)
1968年(昭和43年)
1月22日 苦しい開院一周年 日本人のインド救ライ病院 薬も資材も不足がち休むひまがない医師団(4段)
3月19日 インド救ライ病院の充実に 宮崎院長が帰国(2段)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 5月 3日 政府も力貸せ インド救ライセンター充実で佐藤首相に要望（大阪 1段）
- 5月10日 インドへ二医学生 夏休みに救ライ計画 東大の堺君と設楽君 帰国中の宮崎博士も大歓迎（大阪 横3段）
- 5月12日 ハンセン氏病多発 沖縄多良間島 こども24人も（毎日新聞朝刊3段）
- 5月13日 世界に生きる 日本人の記録 手術に検視に看護に献身 台湾救ライの3人（夕刊7段・写真）
- 6月21日 医師が善意の応援 インドの救ライセンター 来月赴任 世田谷の斉藤夫妻（毎日新聞3段）
- 7月13日 社告・韓国へ救ライ歯科医療奉仕団（毎日新聞朝刊2段）
- 7月14日 韓国救ライ歯科奉仕団の壮行会（朝刊3段）
- 7月14日 20日、韓国へ出発 大阪歯大の救ライ奉仕団（大阪朝刊2段）
1969年（昭和44年）
- 3月29日 “日本の善意”も海外進出 インドの救ライ・センター 来月から本格診療 宮崎院長“経済動物は返上”（4段）
1971年（昭和46年）
- 1月26日 「ぼだい樹の木陰で」 インドで救ライ活動の宮崎博士 30日「人物につぼん」で放映（熊本版 横2段）
1972年（昭和47年）
- 2月19日 ハンセン病者の社会復帰 NHKが放送中止 「それこそ無理解だ」と協力者（横1・5段）
- 2月21日 インドのハンセン病にコロボ計画（名古屋夕刊 1段）
- 6月19日 宮崎松記博士、インドの土に 救ライ協会センターで火葬（3段）
- 8月21日 着実に進むインドの救ライ事業 宮崎博士の遺志結実 期待される本研究陣（3段）
- 9月25日 「声」 韓国の患者に温かい衣類を（2段）
- 10月16日 韓国のハンセン病患者へ 衣類や寄金ぞくぞく 本紙声欄の呼びかけですすでに三万余点 ともしびグループ 近く二便を発送 名古屋（名古屋 4段）
- 10月23日 誤爆の実態を暴露 米の元情報部員 「北」のライ病院爆撃（2段）
- 10月25日 「声」 韓国の患者への援助にお礼（1段）
1973年（昭和48年）
- 1月22日 墜落死の宮崎博士 胸像がインドへ（読売新聞囲い込み=6段）
- 2月 8日 韓国ハンセン病患者へ衣類 交流深まり、近く第二便 ともしびグループ（名古屋夕刊 3段）
- 11月28日 “難病の村”助けて 数百人、悲惨な暮らし 韓国からの帰国女性訴え（大阪4段）
1974年（昭和49年）
- 1月 9日 韓国のハンセン病共同体 移転費用に援助を 日本の学生呼びかけ（大阪 3段）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

- 5月4日 (こころのページ) ハンセン病救済一筋に 宮崎博士の3回忌迎え常盤さんに聞く
慈父とあおがれてインド人の胸中に(大阪 横3段)
1975年(昭和50年)
- 5月21日 韓国のハンセン病患者に支援の輪 下関ロータリークラブの会員ら聖ラザロ村を慰問
「息の長い募金活動を」(下関版 4段)
1976年(昭和51年)
- 7月20日 斎藤院長ら外務大臣表彰 インドの救ライ活動で(1段)
- 7月20日 「人」 インドの救ライ事業から帰った 斎藤俊(1・5段)
1977年(昭和52年)
- 3月20日 「軌跡」 アジア救ライ協会 インドに消えぬ灯(横1・5段)
1981年(昭和56年)
- 12月27日 アジア救ライ協が活動に幕(読売新聞1段)
1983年(昭和58年)
- 6月24日 アジアのハンセン病患者救済 民間基金あす発足 高槻の歯科医ら尽力(大阪夕刊
3段)
- 8月28日 「天声人語」=韓国回復者村キャンプでの日韓学生の汗(囲み1段)
- 9月7日 女高生の募金実り韓国に老人ホーム ハンセン病(夕刊 3段)
- 9月19日 自立の拠点 顔いきいき 韓国ハンセン病患者の「定着村」 家族と共に働く喜び「想
像より高い生活水準」(4段)
- 11月15日 韓国ハンセン病回復者 奉仕活動の青年が報告展 共に生活し良き仲間 交流で消
えた偏見 村人の様子 写真で訴え、呼びかけ(囲み4段)
- 12月14日 韓国のハンセン病回復者村の写真展 あすから大阪・生野で(大阪 1段)
1984年(昭和59年)
- 7月30日 日韓の心結ぶ勤労奉仕 「ハンセン村」50人あす出発(大阪 4段)
1985年(昭和60年)
- 1月19日 救ライの西占氏、インドで死去(読売新聞4段)
- 7月29日 中国のハンセン病患者、大幅に減る(読売新聞1段)
1986年(昭和61年)
- 1月30日 役に立てる日本の技術 ハンセン病補装具づくり 中国の2青年 研修終え帰国(夕
刊 4段)
- 3月4日 ハンセン病回復者交流の家 関西の若者ら韓国で建設(大阪夕刊 横3段)
- 9月23日 「天声人語」=韓国の定着村
- 10月5日 フィリピン ハンセン病の村 この現状を知って サリドマイド障害の荒井貴さん訪
問 粗末な施設・医療・環境 家族の自立への援助も(3段)
1987年(昭和62年)

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

- 4月10日 ハンセン病撲滅活動の医師支援 ペシャワール会 映画と公演の会
(福岡版横3段)
- 4月18日 「ひと」 ハンセン病の在日韓国・朝鮮人を描いた「名くはし島の詩」を著した喜田
清さん(大阪 囲み1段)
- 7月4日 「こころ」 ハンセン病の「好善社」 受けた援助、今度はお返し タイの施設へ奉
仕活動 給水設備贈り根絶めざす(4段)
- 7月18日 ハンセン病治療 バングラで苦闘 尼崎出身の畑野医師 すでに三千人診察(大阪横
1・5段)
1989年(平成1年)
- 7月18日 比のハンセン病患者に光 日本人の医師夫妻 3年間の努力実る 手弁当で治療に没
頭 アキノ大統領も対策に本腰 「隠れた患者」の説得が課題(横4段相当)

六 各期における記事の種類とその特徴

1. 敗戦から1953年末まで

1) この期の記事は、次のような種類に区分することが可能であろう。

医学的知見に関するもの

ハンセン病の「脅威等」に関するもの

全患者収容のための療養所拡張や無らい県運動に関するもの

患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの

療養所の貧しい医療・福祉に関するもの

「救ライ」活動に関するもの

光田健輔等に関するもの

患者運動に関するもの

療養所特設法定での刑事裁判や園隣接地の留置場などに関するもの

その他

2) これらの中でも報道量が一番多いのは、「救ライ」活動に関するものである。49本あり、扱いも大きい。慈善や献身等を讃える記事がもっぱらである。光田健輔に関する記事も同様で、「朝日賞に輝く業績 光田氏 救らい事業・半世紀 世界に冠たり」(1950年1月8日)の見出し記事など、「救ライの父」という面が一方的に強調され、強制隔離政策の推進者という面はまったく省みられていない。

次いで多いのは医学的知見に関するもので、33本ある。ただし、「ライ病は治る! 米国の特効薬で初の退院」(1949年7月18日)、「ライ患者に光明 『全快第一号』出る 特効薬プロミンの偉功」(1950年8月11日)というような見出しも記事も一部にあるものの、そこから一步踏み込んで、ハンセン病に対する誤った理解、偏見・差別を洗浄して行こうというような姿勢はみられない。社会

の「厚い壁」に穴を開けえたかは疑問なしとしない。

3番目に多いのは患者運動のうち、予防法闘争等に関するもので、30本あるが、ほとんどがいわゆるベタ記事である。加えて、「もめるライ患者」、「ライ患者国会に座り込み」、「ライ患者、警察官ともむ」などの見出しからも容易に理解されるように、「トラブル」扱いは一貫しており、「人権闘争」、「人間回復闘争」といった視点はまったくうかがえない。僅かな例外は「おれ達の人権を認めよ！全国のライ患者が作業放棄へ “ひどい罪人扱い”『予防法改正案も地獄の沙汰』 一万二千人勝ちの叫び 想出の悲劇！！」(1953年6月10日)だが、これも「社会の無知と偏見にさいなまれながら、病菌にむしばまれた肉体をベッドに横たえて、淋しく“生ける屍”の生活を送る全国一万二千人余名のらい(ハンセン氏病)患者の念願がかなって、『ライ予防法』が改正されることになったが、その内容が医学の進歩、施設の改善をよそにあいかわらず患者を罪人視し、嫌悪する条項が多く、患者とその家族の基本的な人権を無視し、らいの治療と予防に害あって益なしと患者やその関係者から猛反対を浴びている。」という域にとどまる。

「ライ患者は何を訴える？ 五療養所がスト 駿河の現地に聞く 強制入所反対 所長の懲戒検束権反対」(1953年6月25日)も、駿河の在園患者の訴えを直接聞き、それをかなり詳しく報道している点で注目されるが、これには国側の反論も併記されており、傍観者的で、憲法的観点は希薄といえよう。

草津の栗生楽園の重監房に関するものは12本あるが、大部分はベタ記事で、「狂死・獄死が続出 お菜は僅か梅干一つ “光なき楽泉園”の内情明るみへ」(1947年8月27日)、『草津カンゴク』の人権問題・中央へ レプロ患者代表上京」(同年9月13日)も、見出しの割には、扱いは小さい。患者運動という視点は弱い。フォロー記事も見当たらない。療養所特設法廷での刑事裁判や園隣接地での留置場等に関するものは、「総和会と共進会の対立 楽泉園・患者間の紛争くすぶる 特別法廷設置か」(1950年1月18日)「妥当かレブラの凶悪犯釈放 施設なく療養所へ またも脱走 おののく住民」(1950年2月23日)「問題は刑の執行 懲役二年 楽泉園事件に判決」(1950年6月11日)「控訴審で執行猶予 ライ患者殺人事件」(1951年5月5日)および「レブラ専用留置場建設 市警、厚生省の補助で」(1952年2月6日)の5本だけで、憲法等からみた場合、問題点があるのではないといった視点も欠如している。

差別・偏見のために明らかにされたためか、患者・家族などに生じた「悲劇」に関する記事は、実数に比して、あまりにも少なく、8本で、内容も「一家青酸心中」(1951年1月29日)、「山梨で9人心中、長男がライ病で」(同年1月31日)、「無知の悲劇」(同年7月3日)など、皮相的である。療養所の貧しい医療・福祉に関するものも同様で、3本と少ない。

ハンセン病の「脅威等」に関する記事は、21本と多くはない。うち半数はベタ記事であるが、だからといって、もちろん軽視しえない。次のような見出しがほぼ毎年のように紙面を占めているからである。「ライ患者が買物、映画見物、全生園 監視不十分で自由に外出」(6月9日)「ライ患者を野放し 一ヶ月以上も都内で生活」(6月9日)「“患者の隔離を怠る”警視庁 都衛生局へ抗議」(同日)「ライ患者が集団脱走」(6月23日)「三名殴り殺す、ライ患者乱闘」(1950年1月18日)「朝鮮からライ患者 愛生園長が証言 ふえた日本潜入」(5月19日)「なぜライ病の母親と結婚したか 父

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

と姉妹ら五人殺傷「悪魔の家」呪い次男が凶行(6月18日)、「南鮮からライの脅威」(7月10日)、「脱走のライ患者乗車 大阪行夜行列車で客が発見」(7月14日)、「『つばめ』にライ患者」(1952年1月31日)、「ライ患者と間違われて 親からも追い出される」(3月30日)、「ライ患者脱走 妻を傷つく」(4月16日)、「ライ患者町を歩く」(1953年2月24日)

全患者収容のための療養所拡張や無らい県運動等に関するものも、「警視庁看守にライ患」(1949年2月2日)、「熊本に世界一の『ライセンター』」(1951年6月11日)、「ライ患者一掃へ ベッドも千五百床ふやす」(1952年1月10日)など、4本と少ないが、同様に軽視しえない。全患者隔離収容政策およびそのための無らい県運動が所与の前提とされていることは明らかであろう。

他方、地方紙であるが、松丘保養園の立地するエリアを主な舞台とする東奥日報の状況をみると、計39本の記事のうち、一番多いのは、「救ライ」活動等に関するものの9本、二番目は、皇室による救済等に関するものの6本、予防法闘争に関するものは5本である。患者間のトラブルに関するものは4本、入所者の声に関するものは3本である。その他、医学的知見に関するものが2本、新患者発生に関するものが1本、患者・家族等に生じた「悲劇」に関するものが1本、慰問・寄贈等に関するものが1本、光田健輔等に関するものが1本、ハンセン病関係学会等に関するものが1本で、ほとんどがベタ記事である。

2. 1954年から1960年末まで

1) この期の記事は、次のような種類に区分することが可能であろう。

医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの

新患者等に関するもの

全患者収容のための療養所拡張や無らい県運動に関するもの

患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの

ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なもの

- 1. 差別・偏見等を扱ったもの

2. ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの

- 1. 療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの

- 2. 外来医療その他、医療・福祉の改善等に関するもの

- 1. 国内の「救ライ」活動に関するもの

2. 対外的な「救ライ」活動に関するもの

3. 皇室等に関するもの

4. 国会議員等に関するもの

光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの

慰問・寄贈等に関するもの

宗教に関するもの

- 1. 「未感染」児童に関するもの

2. 園内学校等に関するもの

3. 黒髪校事件等に関するもの

入所者の文芸作品や音楽会、著書等を取り上げたもの

患者運動に関するもの

社会交流等に関するもの

- 1. 社会復帰等に関するもの

2. 長島架橋に関するもの

藤本事件に関するもの

- 1. 法改正や法廃止等に関するもの

2. 人権侵害ないし人権擁護等に関するもの

トラブル等に関するもの

その他

2) この期の朝日新聞記事は計71本で、他紙に比べて、本数が突出して多い。それは1961年以降も同様であるが、これには、東京版だけでなく、大阪版や西部版が含まれていることが大きく与っている。そのうち報道量が一番多いのは、黒髪校事件に関する17本である。「ライ非感染児童“龍田寮の子”は入学させぬ 同盟休校を決議 反対 父兄で町民大会 熊本市黒髪校 解決まで休校継続・反対派のPTA総会で声明書 “心配はない”(厚生省、文部省の談話)」(1954年4月9日、西部)、「PTA論争よそに 教室で唱歌習う 非ライ児童交えて授業 」(4月10日、西部)、「廊下で賛否の激論 非ライ児共学第一日の風景 出欠決める権限PTAにはない・黒髪校問題に市教委の見解 差別扱いは正しくない・市教委が声明書」(同日、熊本版)、「登校学童も自習支度 非ライ児問題、六年生はこうみる うれしそうな子供たち・寮母さん語る」(4月11日、熊本版)、「同盟休校派、自習場を開く 熊本非ライ児入学問題の対立深刻化す 神社など17カ所に 家庭教師も雇って 校長室に反対本部 “教委で適切な処置を 文部省の方針 原則は通学さすべきだ”」(4月13日、西部)、「フロ屋まで“第二校” 熊本非ライ児入学で同盟休校」(同日、大阪)、「番台で父兄が監視 銭湯教室 黒髪小学校の“分教場”めぐり 各地から投書や電報」(同日、熊本版)、「非ライ児の健康診断 窮余の熊本市教委が提案」(4月14日、西部)、「黒髪校・二つの学習風景 足が痛い銭湯教室・反対派 大きな室にたった五人・賛成派」(同日、熊本版)、「PTA反対派に警告 熊本法務局 非ライ児童問題で」(4月15日、西部)、「“学校は面白い” さわぎよそに無邪気な非ライ児 “伝染せぬ” 根拠と安心感をまず徹底 非ライ児問題 他校のPTAはこうみる 校門にライの歌 反対派、自習つづく」(同日、熊本版)、「こじれた非ライ児問題 仲裁案は練り直し 龍田寮側が再診を拒否」(4月16日、熊本版)、「改めて解決案練る 非ライ児問題、熊本市文教委が協議 “再診”仲裁案に賛否 自習場の出欠一応とらせる」(4月17日、熊本版)、「きょうから臨時休校 熊本・黒髪校」(4月22日、大阪)、「黒髪校の同盟休校解決」(4月23日、大阪)、「黒髪校きょう開校」(5月7日、大阪)、「入学式もお預け 熊本 非ライ児問題再燃」(1955年4月11日、大阪)、「解決、入学式行う 非ライ児でもめた黒髪校」(4月18日、大阪)など、中立的な立場から報道されている。ただ、これらはいずれも東京版ではなく、西部版のものがほとんどである。

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

2番目は、慰問・寄贈等に関する8本で、「ライ患者を俳句で慰問 全国の療養所を回る 大阪の料理屋さん 師の遺志ついで25年」(1960年1月19日、大阪)など、市民ボランティア的なものを取り上げた記事も出始めている。3番目は、医学的知見およびハンセン病学会等に関する7本で、4番目は、「インドへ医師 ライオンズ・クラブ 国際的救ライへ」(1959年5月14日、大阪)「救ライ後援のため宮崎医博渡印」(5月15日)「『人』 救ライ事業のためインドへ行く 宮崎松記」(5月19日、大阪)「前恵楓園長にインドから招請 ライ患者救いに」(10月28日、西部)など、対外的な「救ライ」活動に関する5本である。

5番目は、国内の「救ライ」活動に関する4本と、光田等、「救ライ」に尽くした人等に関する4本である。前者では、「悲願の救ライ映画製作へ 家も売り引退作家 四月から素人ばかり長島を舞台に 大谷楽苑もコーラスで協力」(1960年3月26日、大阪)など、市民ボランティア的なものを取り上げた記事が出始めている。後者では、相変わらず、「光田愛生園長辞任」(1957年8月31日)「“ライ患者の父” 退職」(9月1日、大阪)「『寸描』 長島愛生園長を辞職した 光田健輔」(9月5日)「救ライの六十年 光田健輔氏の業績」(『週刊朝日』11月7日号)といった報道である。7番目は、藤本事件に関する4本で、藤本事件も黒髪校事件と同じく熊本で起こっているが、東京版で扱われている。「ライ患者のゆえに “不当の判決”と怒る 熊本県の殺人事件 各方面で問題視」(1956年4月11日)「一年以上も慎重に審理 当時の真庭判事の話」(同日)「“自白に任意性認めず” ライ患者公判・口頭弁論」(4月13日)「ライ患者の上告棄却 死刑確定」(1957年8月23日)。

8番目は、皇室等に関するもの、ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なもの、患者運動に関するもの、各3本で、ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なものというのは、「ライ患、韓国から密航 橋本厚相が閣議に報告」(1958年7月8日)「山陽線で消毒騒ぎ ライ患者が乗り込む」(1960年4月21日、大阪)といったものである。

その他、入所者の文芸作品等を取り上げたもの2本。「『天声人語』 結びは、「この不幸な人々を救うのは、健康な人々の義務である」(1958年8月20日)など、ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの2本。全患者収容のための療養所拡張や無らい県運動に関するもの1本。患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの1本。療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの1本。宗教に関するもの1本。「未感染のライ患者の子を救おう 第一回保育児童福祉協議会から 永遠の十字架か 立ち上る施設の人たち」(1956年9月5日)。社会交流に関するもの1本。社会復帰等に関するもの1本(軽快退所者の問題)が散見される。差別・偏見を扱ったもの、法改正等に関するもの、人権侵害等に関するものなどは見出せなかった。そのなかで、「『論壇』 『救ライの日』を「闘ライの日」に 社会は偏見を去り、当局は人権を守り 玉井乾介(「死刑らい患者を救う会」事務局長、岩波書店第一編集課長)」(1958年6月25日)は、注目されよう。

3)産経新聞記事は9本で、内訳は、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの2本、国内の「救ライ」活動に関するもの2本、患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの1本、光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの1本などである。藤本事件に関するものも、「私は無実です！ 死刑囚のライ患者が悲痛な叫び “手を抜いた裁判で 証拠デッチ上げ” 最高裁への特別抗告もダメか

藤本松夫という男 平和な一家どん底に 軽い症状に“入園通知” 短銃を乱射して逮捕」(1960年3月8日)というように、1本ある。

4) 東奥日報記事は34本で、内訳は、慰問・寄贈等に関するもの8本、入所者の文芸作品等を取り上げたもの4本、国内の「救ライ」活動に関するもの4本、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの2本、光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの2本、園内学校に関するもの2本、差別・偏見等を取り扱ったもの1本、皇室等に関するもの1本、国会議員に関するもの1本、宗教に関するもの1本、黒髪校事件に関するもの1本などである。

このうち、園内学校に関するものとしては、「ライ患者の子を教えて20年 なぜ冷たい世間の眼(1956年6月17日)」「いじめずに明るい感じ 松丘の二葉分校 全国療養児童展覧開く」(1957年11月8日)、「ライ園に春の訪れ 効薬と進学で笑いとり 四月に修学旅行 松丘 二教師の情熱実る」(1959年2月24日)などがある。黒髪校事件に関するものとしては、「一般学校に“通学” 法務省で結論 ライ療養所で非感染児童」(1954年2月17日)など。また、入所者の文芸作品等を取り上げたものとしては、「点字に見出した生活の喜び 舌や唇で読む聖書 松丘保養園の盲の患者 文集出す計画も」(1955年5月19日)、「歌集白樺 ハンセン氏病患者の作品よむ 中野菊夫」(1957年11月10日)などが見受けられる。他方で、「成否危うし定員法改正 通らねばライ患者のデモ」(1954年5月31日)や、「秋田駅にライ患者 自転車泥の本県人と判明」(6月12日)など、隔離推進的なものも一部ながら存する。

3. 1961年から1975年末まで

1) この期の記事は、次のような種類に区分することが可能であろう。

医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの

新患者等に関するもの

患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの

ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なもの

- 1. 差別・偏見等を扱ったもの

2. ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの

- 1. 療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの

- 2. 外来医療その他、医療・福祉の改善等に関するもの

- 1. 国内の「救ライ」活動に関するもの

2. 対外的な「救ライ」活動に関するもの

3. 皇室等に関するもの

光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの

慰問・寄贈等に関するもの

宗教に関するもの

入所者の文芸作品や音楽会、著書等を取り上げたもの

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

患者運動に関するもの

社会交流等に関するもの

- 1. 社会復帰等に関するもの

2. 長島架橋に関するもの

- 1. 法改正や法廃止等に関するもの

2. 人権侵害ないし人権擁護等に関するもの

トラブル等に関するもの

その他

この期の朝日新聞記事は計155本で、そのうち報道量が一番多いのは、対外的な「救ライ」活動に関する30本である。「救ライ病院 秋ごろ着工 訪印の那須博士帰国」(1963年2月9日)、「インド救ライ事業 協定書に調印」(5月31日、大阪)、「救ライセンター アグラで定礎式 日本国民の浄財で建設」(12月16日、大阪)、「三次高に募金袋 ハンセン氏病 インドの実情きき」(1964年12月8日、呉版)、「六月から巡回診療 インド救ライ・センター 宿舎が完成、本館は11月に」(1965年3月20日)、「看護婦さん初名乗り ハンセン氏病救いにインドへ」(5月18日、大阪)、「母国の救ライに義金 在日インド人ら 渡印の宮崎博士に」(6月16日、大阪)、「『人』 救ライ院長としてインドに行く宮崎松記」(7月25日、大阪)、「政府も力貸せ インド救ライセンター充実で佐藤首相に要望」(1968年5月3日、大阪)などが、それである。台湾、韓国への活動が、「歯の治療に台湾へ 大阪歯大救ライ奉仕団 十五カ所で数百人に 十八年の実績 今夏も招かれて」(1965年7月26日、大阪)、「『声』 韓国の患者に温かい衣類を」(1972年9月25日)、「韓国のハンセン病患者へ 衣類や寄金ぞくぞく 本紙声欄の呼びかけですすでに三万余点 ともしびグループ 近く二便を発送 名古屋」(10月10日、名古屋)、「『声』 韓国の患者への援助にお礼」(10月25日)、「韓国ハンセン病患者へ衣類 交流深まり、近く第二便 ともしびグループ」(1973年2月8日、名古屋)、「“難病の村” 助けて 数百人、悲惨な暮らし 韓国からの帰国女性訴え」(11月28日、大阪)、「韓国のハンセン病共同体 移転費用に援助を 日本の学生呼びかけ」(1974年1月9日、大阪)、「韓国のハンセン病患者に支援の輪 下関ロータリークラブの会員ら聖ラザロ村を慰問 『息の長い募金活動を』」(1975年5月21日、下関版)など、大きく取り上げられているのも特徴である。対外的とはいえないが、沖縄関係の記事も、「神戸から沖縄へ 女高生十人出発 ハンセン氏病病院慰問」(1966年7月31日、大阪)、「沖縄のハンセン氏病を視察 大阪救ライ協会の一行」(1967年8月21日)も目につく。

2番目は、光田等、「救ライ」に尽くした人等に関する19本である。「愛生園名誉園長に ライ病の権威 光田さん」(1964年5月10日、岡山版)、「光田先生を悼む 林芳信 慈愛の心で見える人 救ライに一生をささげる」(5月14日)、「生涯を“救ライ”に 世界に貢献した研究」(5月15日、大阪)、「ライとの戦いに終始 光田さんの死 悲報に沈む島の人たち」(同日、岡山版)、「防府で光田翁市葬」(6月2日)、「慈父救ライに死す インドに病舎建設へ奔走 宮崎博士と固い約束」(1967年4月26日、大阪)、「宮崎松記博士、インドの土に 救ライ協会センターで火葬」(1972年6月19日)といった報道で、異なる評価がありえるといった視点はうかがえない。

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

3番目は、医学的知見およびハンセン病学会等に関する16本と、社会復帰(=里帰り事業)等に関する16本で、里帰り事業に関する報道については、「県がハンセン氏病全治者を招く 鳥取 “島”から故郷へ旅 世間の誤解とくすみ」(1964年11月4日)、「ハンセン氏病全治者 鳥取県が故郷に招く 社会復帰を願って」(同日、大阪)、「二十年ぶり 故郷鳥取へ ハンセン氏病全治の四人」(11月5日)、「収容者の郷愁訴える ハンセン氏病歴者鳥取入り」(同日、大阪)、「『人』 ハンセン氏病全治者の郷里招待を思いついた 加倉井駿一鳥取県厚生部長」(11月5日、大阪)、「各地から相次ぐ賛辞 反響呼んだ病歴者の“里帰り”」(11月14日、鳥取版)、「奈良県でも里帰りを決める ハンセン氏病無菌者」(1965年11月4日)、「偏見に苦しむ人救う 近畿中国 十五府県の共同事業」(4月22日、大阪)、「奈良県出身者集団の里帰り 愛生・光明園療養者」(同日、大阪)、「ハンセン氏病の十人里帰り 奈良で二泊三日」(5月11日、大阪)、「里帰り費用を予算化 奈良、ハンセン氏病患者に」(1966年2月22日、大阪)、「近く待望の里帰り 韓国で闘病27年の老人 ハンセン氏病好転」(1968年7月24日、大阪)、「ことしは66人里帰り 無菌の人 ハンセン病療養所から」(1971年9月19日、長崎版)、「母よ、生きていて ハンセン病克服した砂川さん 37年ぶり里帰りへ」(1972年5月13日、大阪)など、大阪版を中心として、継続的かつ積極的に取り上げられている。

ただ、「病歴者」(1964年11月5日)、「無菌者」(1965年3月6日)といった表現が用いられている点は気になる。また、「地元民から横やり ライ回復者の施設建設」(1964年8月11日、奈良版)、「“他の土地に建設へ” ハンセン氏病回復者の家 奈良市長申入れ」(12月8日、奈良版)などの報道に見られるような、自治体主導の「里帰り事業」の限界についての掘り下げた考察は存在しない。「里帰り施設建設へ ハンセン氏病の全快者 社会復帰の道開く 和歌山」(1965年10月9日、大阪)、「夏休みの大学生たち 社会復帰施設つくる 奈良 ハンセン氏病患者救おう」(1967年7月29日)などは、従来の「救ライ」観を見直す契機となりえるもので、「ハンセン氏病 外来診療行え 調査会、厚相に報告」(1970年8月7日、大阪)も、社会復帰問題を考える上で重要なものだが、そうはなっていない。

5番目は、理解を求めるもの15本である。大阪版が中心で、「“ライは治る”とPR 多磨全生園 年賀状を利用して」(1961年12月26日、都下版)、「ハンセン氏病に理解 厚生省など運動始める」(1965年6月21日)、「『今日の問題』 ライへの理解」(同日)、「映画会でPR あすから『らいを理解する週間』」(1966年6月18日)、「『標的』 あつい壁」(1970年5月2日、大阪)、「『地に生きる』 藤川治水氏 無知と偏見の“厚い壁” ハンセン氏病 自主映画で打破る」(5月15日、大阪)、「40周年迎える長島愛生園 治療中は約350人 “暗さ”あいついで改善」(11月6日、岡山版)、「『カルテ』 ライ患者の孫との結婚 遺伝は全くない 大切なのは勇気」(1971年1月10日)、「『正しい知識広めて』 ハンセン病患者 県に偏見除去訴え」(1972年6月22日、長崎版)、「全国ハンセン病連絡協が発足」(1973年7月20日)などが見られる。

「『あつい壁』上映 17・18日、大阪SABホール ハンセン病差別を告発」(1972年6月13日、大阪)、「『あつい壁』を自主上映 ハンセン病差別を告発 労組員らが実行委作り 豊中」(11月21日、大阪)、「『ハンセン病対策に役立てて』 自主上映の利益寄付 『あつい壁』上映実行委」(12月2日、大阪)、「『あつい壁』を見た ハンセン病対策に 豊中二中生徒会が寄付」(12月30日、大

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

阪)など、大阪版を中心に、「厚い壁」の上映運動なども取り上げられているが、「救ライ」観を打ち破るまでにはいたっていない。

6番目は、「ライ施設へ千羽ヅル 赤穂の杉ノ子子ども会」(1963年9月1日、姫路版)などをはじめ、慰問・寄贈等に関する13本で、7番目は、「長島愛生園 患者の苦悩浮彫り 『救ライの日』に句集出版」(1963年6月21日、大阪)など、入所者の文芸作品等を取り上げた10本である。

8番目は、患者運動に関する8本で、「40人ハNST 愛生園の患者」(1964年11月25日、岡山版)、「国の補助金ふやして ハンセン氏病患者が国会に陳情」(1968年12月22日)、「ハンセン病に理解を菊池恵楓園患者が県に陳情」(1972年6月27日、大分版)、「われわれを人間並みに ハンセン病患者初めて街頭デモ できぬ社会復帰 医師も薬も不足だらけ」(7月4日)、「施設改善など訴え 国立菊池恵楓園 患者が決起集会」(同日、熊本版)、「ハンセン病の847人に特別給与金を支払い」(7月27日)、「療養所職員を減らさないで ハンセン病患者協訴え」(9月18日)などがそれである。憲法論や人権論の観点からのものとはいえないものの、中立的な立場から取り上げるようになったこと自体、一定の変化といえよう。

9番目は、国内の「救ライ」活動に関する5本で、10番目は、「愛ゆえに夫から去る ライ病と診断された女 = T B S テレビ」(1963年9月24日、番組案内案欄)など、患者・家族等に生じた「悲劇」に関する4本である。

その他は、「中学生ら47人感染 沖縄の離島調査で分る 二年ぐらいで治る」(1967年6月16日)、「ハンセン氏病本土の10倍も 宮古・八重山群島の調査 家庭・学校でも感染 医師不足 潜在する保菌者」(同日)「沖縄へ検診・調査班 結核・ハンセン氏病対策 厚生省 総理府」(9月12日)など、新患者等に関する3本、ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なもの3本、差別・偏見等を取り扱ったもの1本、療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの3本、外来医療その他、医療・福祉の改善等に関するもの3本、皇室等に関するもの2本、宗教に関するもの2本などである。隔離推進的なものとしては、「ライ病院から逃げ無賃乗車 急行電車を消毒」(1963年1月30日)、「上陸寸前みつかる 神戸港 奄美からライ患者」(5月23日、大阪)などが見られるが、この種の記事は、1965年8月21日の「ハンセン氏病の患者 横浜刑務所を出る」を最後に姿を消している。差別・偏見を扱ったものも、『『季節風』 あるテレビドラマへの疑問」(1964年4月14日、大阪)、『『新日本列島』 長島愛生園(岡山県) 窓は開かれたが ハンセン氏病へ消えぬ偏見」(1965年2月14日)、「ハンセン病患者の社会復帰 NHKが放送中止 『それこそ無理解だ』と協力者」(1972年2月19日)に止まっており、理解の意味の見直しというところにはまでは展開されていない。

なお、1973年から1978年の間は、報道量が極めて少なくなり、計40本に過ぎない。ハンセン病問題に対する関心が薄れたといえようか。

2) 読売新聞の記事は14本で、本数は多くない。1976年以降も同様の傾向が認められるが、最近まで西日本を主たる守備範囲としていなかったことによるものと思われる。内訳は、「救ライの灯消さず 宮崎博士の葬儀」(1972年6月23日)、「墜落死の宮崎博士 胸像がインドへ」(1973年1月22日)など、「救ライ」に尽くした人等に関するもの5本、医学的知見およびハンセン病学会等に関するも

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

の4本、「沖縄離島に『ハンセン氏病』流行」(1968年5月11日)、ハンセン病の「脅威」等、隔離推進的なもの1本、ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの1本、国内の「救ライ」活動などに関するもの1本、皇室等に関するもの1本などとなっている。「野放しのライ患者 多磨全生園」(1960年1月11日)の他方で、「社説『らい』に正しい理解と温かい目を」(1975年6月24日)がみられる。

3) 毎日新聞の記事は43本で、そのうち報道量が一番多いのは、理解を求めるもの7本と、医学的知見およびハンセン病学会等に関する7本とである。そのうち、前者は、「新日本列島 窓は開かれたが 長島愛生園 ハンセン病へ消えぬ偏見」(1965年2月14日)、「ライ患者に暖かい目を 厳しい社会復帰 きょうから正しく理解する週間」(6月20日)、「ライを正しく理解する週間 きょうから」(6月21日)、「『生活の壁』乗り越えて 冷たい目にも負けず 元ライ患者の妻の記録」(6月26日)、「ハンセン氏病の差別なくせ 熊本で自主映画」(1970年1月8日)、「ライを正しく理解する週間 私 の人生59歳いま開く ライ病に勝った 友情に包まれ初就職」(1971年6月21日)、「NHK、一部カットし30日放送 ハンセン氏病扱ったTV『人間列島』」(1972年3月28日)、「『偏見なくせ』と連絡協議会 ハンセン氏病療養所の12市町」(1973年7月20日)などが、それである。

3番目は、対外的な「救ライ」活動に関する4本である。その内訳は、「社告・韓国へ救ライ歯科医療奉仕団」(1968年7月13日)、「韓国救ライ歯科奉仕団の壮行会」(7月14日)、「20日、韓国へ出発 大阪歯大の救ライ奉仕団」(同日、大阪)、「韓国救ライ歯科奉仕団24人が出発」(7月20日)、「韓国救ライ団帰る」(8月6日)などである。4番目は、「終日深い悲しみに 救ライの戦士・光田氏眠る 患者たち、心から黙とう」(1964年5月14日、岡山版)、「『心の柱』失ったよう 悲痛な表情で交々語る」(5月15日、岡山版)など、「救ライ」に尽くした人等に関する5本と、「初の退所者更生施設 つくる きょう救ライの日」(1963年6月25日)、「鳥取県がハンセン病全治者を招く “島”から故郷へ旅 世間の誤解とくすしみ 危険もなく大変結構(厚生省公衆衛生局長の話)」(1964年11月4日、大阪)、「10月 1日 ハンセン氏病全快者に“社会復帰センター” 関西労働キャンプの学生たち 自力で“いこいの家”」(1965年11月10日)など、社会復帰等に関する5本とである。6番目は、国内の「救ライ」活動に関する4本で、7番目は、「生活待遇の改善求め座り込む ハンセン氏病患者が厚生省で」(1968年7月16日)、「窮状訴える ハンセン氏病患者代表」(1971年6月30日)、「平等な医療の道を ハンセン氏病患者ら決起」(1972年7月4日)など、患者運動等に関する3本である。

その他は、「47人がハンセン氏病に 沖縄宮古・八重山の学童ら」(1967年6月16日)、「ハンセン氏病多発 沖縄多良間島 こども24人も」(1968年5月12日)、「沖縄のハンセン氏病は誤診」(6月19日)、「沖縄・愛楽園をたずねて 患者七百に医師三人」(1971年1月16日)など、新患者等に関するもの2本、患者・家族等に生じた「悲劇」に関する1本、療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの1本、皇室等に関するもの1本、宗教に関するもの1本、入所者の文芸作品等を取り上げたもの1本などである。

4) 東奥日報の記事は25本で、その内訳は、慰問・寄贈等に関するもの6本、光田等、「救ライ」に

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

尽くした人等に関するもの4本、医学的知見およびハンセン病学会等に関する2本、理解を求めるもの2本、国内の「救ライ」活動などに関するもの2本、患者運動等に関するもの2本、新患者等に関するもの2本、差別・偏見等に関するもの1本、園内学校に関するもの1本、入所者の文芸作品等に関するもの1本、社会復帰等に関するもの1本、などである。

「年々ふえる社会復帰 きょう救ライの日 驚くほどの明るさ 松丘保養園 社会の理解も深まる」(1961年6月25日)、「生徒が一人の分校 青森市新城小二葉分校」(1963年3月8日)、「ライ病と戦う人たち 社会復帰に努める 25日は『救ライの日』 慰問と励まし続々」(6月19日)、「心痛む望郷の歌 松崎水星歌集『樅の木』 戸塚博」(1964年2月6日)、「付き添いの作業を拒否 全患協が実力行使」(6月7日)、「全患協の闘争体制解」(6月10日)、「社説 ライ征服と社会復帰に協力を一般の正しい理解が推進力」(6月22日)、「投書 保養園移転案は迷惑」(8月17日)などの記事が目につく。

4. 1976年から1990年末まで

1) この期の記事は、次のような種類に区分することが可能であろう。

医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの

新患者等に関するもの

患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの

- 1. 差別・偏見等を扱ったもの
- 2. ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの
- 1. 療養所の貧しい医療・福祉等に関するもの
- 2. 外来医療その他、医療・福祉の改善等に関するもの
- 1. 国内の「救ライ」活動などに関するもの
- 2. 対外的な「救ライ」活動などに関するもの
- 3. 皇室等に関するもの

光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの

慰問・寄贈等に関するもの

宗教に関するもの

入所者の文芸作品や音楽会、著書等を取り上げたもの

患者運動に関するもの

社会交流等に関するもの

- 1. 社会復帰等に関するもの
- 2. 長島架橋に関するもの
- 1. 法改正や法廃止等に関するもの
- 2. 人権侵害ないし人権擁護等に関するもの

トラブル等に関するもの

その他

2) この期の朝日新聞の記事は、137本で、そのうち、報道量が一番多いのは、対外的な「救ライ」活動に関する16本である。

「韓国・ハンセン病快復者の「村」 日本の若者が“支援” 労働通し培うきずな 奈良で交流ぶり展示の催し」(1979年12月18日、大阪)、「祖国へ交流の旅 ハンセン病の在日韓国人患者 隔離から約半世紀 日本キリスト教・救癩協会計画 9月上旬に出発」(1983年5月16日)、「『天声人語』=韓国回復者村キャンプでの日韓学生の汗」(8月28日)、「女高生の募金実り韓国に老人ホーム ハンセン病」(9月7日)、「自立の拠点 顔いきいき 韓国ハンセン病患者の『定着村』 家族と共に働く喜び『想像より高い生活水準』」(9月19日)、「韓国ハンセン病回復者 奉仕活動の青年が報告展 共に生活し良き仲間 交流で消えた偏見 村人の様子 写真で訴え、呼びかけ」(11月15日)、「韓国のハンセン病回復者村の写真展 あすから大阪・生野で」(12月14日、大阪)、「日韓の心結ぶ勤労奉仕 『ハンセン村』 50人あす出発」(1984年7月30日、大阪)、「『ひと』 韓国の『定着村』でワークキャンプ生活をしている 柳川義雄さん」(8月10日、大阪)、「中国の2青年 研修終え帰国」(1986年1月30日)、「ハンセン病回復者交流の家 関西の若者ら韓国で建設」(3月4日、大阪)、「ハンセン病回復者と働こう 若者37人、韓国へ出発」(8月8日、大阪)、「『天声人語』=韓国の定着村」(9月23日)、「フィリピン ハンセン病の村 この現状を知って サリドマイド障害の荒井貴さん訪問 粗末な施設・医療・環境 家族の自立への援助も」(10月5日)、「『天声人語』=在日韓国・朝鮮人の元患者」(1987年3月30日)、「ハンセン病撲滅活動の医師支援 ペシャワール会 映画と公演の会」(4月10日、福岡版)、「『ひと』 ハンセン病の在日韓国・朝鮮人を描いた『名くはし島の詩』を著した喜田清さん」(4月18日、大阪)、「『こころ』 ハンセン病の『好善社』 受けた援助、今度はお返し タイの施設へ奉仕活動 給水設備贈り根絶めざす」(7月4日)、「ハンセン病治療 バングラで苦闘 尼崎出身の畑野医師 すでに三千人診察」(7月18日、大阪)、「比のハンセン病患者に光 日本人の医師夫妻 3年間の努力実る 手弁当で治療に没頭 アキノ大統領も対策に本腰 『隠れた患者』の説得が課題」(1989年7月18日)。

2番目は、「(死亡記事) 志賀一親氏 国立療養所菊池恵楓園長」(1976年9月24日)、「救ライ一筋に尽くす 悲しみに沈む患者ら 楽しみにしていた保健文化賞授賞式 急死した志賀園長」(9月25日、熊本版)など、「救ライ」に尽くした人等に関する16本と、「『ハンセン病の軌跡』が本に 朝日新聞香川版に連載 差別と偏見打破 患者・家族側に立って」(1978年8月4日、四国版)、「ハンセン病と闘う患者たち」(1988年2月14日)、「在日ハンセン病患者苦難の証言 翻訳し母国で出版 韓国人留学生」(1989年6月13日、大阪)など、入所者の文芸作品等を取り上げた10本とである。

3番目は、長島架橋に関する14本で、「岡山・長島架橋ルート決まる 63年度完成の予定」(1983年6月22日、大阪)、「“人間回復の橋”やっとならぬ 来年度の着工決定 瀬戸内・長島のハンセン病施設 患者長年の悲願 社会と交流の一助」(1984年12月27日)、「ハンセン病の島へ橋」(1987年10月9日)、「『今日の問題』人間回復の橋」(12月4日)、「本土結ぶ橋にゲート ハンセン病岡山の施設 『また隔離』患者反発」(12月18日)、「『愛の懸け橋』になぜゲート 長島のハンセン病療養施設 『新たな隔離』患者ら反発 国の建設工事中断」(12月21日)、「ゲート撤去申し入れ ハンセン病患者

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

協(12月25日、大阪)「厚生省、代案示す『愛の懸け橋』ゲート」(1988年1月13日)「愛の架け橋 開通、『門』で足踏み 岡山・長島のハンセン病国立療養所 患者側『代案も自由を規制』 厚生省『外部者による環境破壊心配』」(2月27日、大阪)「監視ゲート撤去し 愛の架け橋開通へ」(3月21日、大阪)「人間回復への悲願『愛の架け橋』開通 瀬戸内・長島と本土結び」(5月9日、大阪)「ハンセン病患者の島 本土と結び路線バス」(1989年11月2日、大阪)

4番目は、理解を求めるもの13本で、「ハンセン病克服 鈴木重雄さんが自殺」(1979年2月2日)「隔離で偏見だけ温存 ハンセン病は解決してない」(4月12日)「『偏見のない社会を』らい病理解する会で訴え」(6月29日、大阪)「ハンセン病患者に『交流の家』 根強い偏見解消めざし 住み込んで啓発10年 回復者の宿を経営する 飯河四郎・梨貴夫妻」(6月20日、大阪)「きょう京都で開催 ハンセン病を語る集い」(1981年12月6日、大阪)「ハンセン病 誤解やめて お坊さんが自費出版、訴える 社会復帰阻む差別・偏見」(1982年2月7日、東京)「『ハンセン病へ誤解助長』作家栗本薫さん謝罪 SF小説に抗議受けて」(3月16日)などが、それである。「救ライ協が近く解散」(1981年12月27日)および「『現代社会』 偏見改め人権への配慮必要 もはや不治ではないハンセン病」(1984年6月24日)などとあわせ、「理解」の意味が、国・社会の側からの「救ライ」から、患者等の側の「差別・偏見解消」等へと質的に進化している。ただし、他方で、「救ライ」に尽くした人等に関する記事も依然として多い。

5番目は、法改正等に関する7本である。「『らい予防法』改正を討議へ 全患協『時代遅れ 差別の根拠』“最後”の闘い、曲折も」(1981年5月15日、大阪)「定期支部長会開く ハンセン病患者協」(1983年5月8日、大阪)「正しい理解へ法改廃を討議 ハンセン病患者団体」(1984年6月24日、大阪)「『論壇』 『らい予防法』の抜本改正を 常識にも医療の実情にもそぐわぬ 三輪照峰(世界ハンセン病友の会代表)」(1985年8月22日)「『不惑の憲法』 二つの予防法 人権より社会を優先」(1987年5月9日)「『らい予防法』改正求め運動」(1988年10月18日、大阪)「『論壇』 偏見生む『らい予防法』は廃止を 通院入院可能なのに追い出す病院も 牧野正直=大阪府立公衆衛生研究所微生物課長」(1990年6月14日)「ハンセン病患者ら決起 高齢化し『最後の闘い』 今なお『法で隔離』改正を 10月に議員要請 『国は啓発も不十分』 “声の面会”も果たせず」(7月31日、大阪)などで、「『社説』 『らい予防法』改正は当然だ」(1990年11月18日)にもみられるように、明確に法廃止論の立場からのもので、憲法論も顔を見せ始めている。

6番目は、医学的知見およびハンセン病学会等に関する6本で、7番目は、慰問・寄贈等に関する5本と、社会復帰等に関する5本とである。社会復帰関係では、大阪版であるが、「『今日の問題』 社会復帰」(1978年3月14日)「若者ら肩組み交流 天理 ハンセン病患者里帰り」(1980年5月9日、大阪)「ハンセン病は癒えても 社会復帰に苦闘の記録 画廊主らの協力で出版」(1989年9月26日、大阪)などのほか、「ハンセン病患者診察 香川県立中央病院 公機関で初」(1977年9月4日、大阪)「ハンセン病患者 | 診察します | 宇治の曽根病院 差別に憤り感じ 全国で初めての“宣言”」(1980年6月25日、大阪)「ハンセン病強制隔離に償いを 無菌の元患者を診察 差別と誤解に闘う姿勢 京都・曽根病院 曽根久郎さん 合併症治療は当然 社会復帰にほしい理解」(9月25日)などが注目される。社会復帰に理解を求めるもののほか、強制隔離に「償い」といった表現も出始めてい

る。

その他は、皇室等に関するもの5本。国内の「救ライ」活動などに関するもの4本。「政府やっ和本腰 ハンセン病 医者探し始める」(1979年4月1日、大阪)など、療養所の貧しい医療・福祉に関するもの3本。宗教に患関するもの3本。社会交流に関するもの3本。人権侵害等に関するもの2本。「ハンセン病に会員不安」 ゲートボールから 療養所のチーム 群馬の協会」(1987年12月5日)など、差別・偏見等に関するもの2本。外来医療その他、医療・福祉の改善等に関するもの2本。患者運動に関するもの2本。「長島愛生園の高校「新良田教室」最後の卒業生送り」(1987年3月4日)などである。「司法修習生、ハンセン病施設へ 岡山 見学し懇談、患者ら歓迎」(1984年5月9日、大阪)のほか、「ローマ法王ハンセン病患者と接見 岡山など4県の一行1人ひとりと握手 苦しみの体験 世界平和にささげて」(1989年12月4日、大阪)も目につくが、修習生の訪問が記事になるということは、裏返せば、法律家の園訪問が乏しかったということであろう。

なお、長島架橋に関する「人間回復の橋」(1984年12月27日)を媒介として、以後、「人間回復」がハンセン病問題のキーワードとされるようになったが、従前の「救ライ」に代えて「ハンセン病救済」(1982年6月25日)が用いられていること、また、「ハンセン病元患者」(1988年8月14日)に加えて、「ハンセン病回復者」(1979年8月18日)という表現が使われている点も見逃すことはできない。

3)読売新聞の記事は17本で、その内訳は、「ライ患者の光となって 神山復生園の井深八重さん(79歳) 偏見と闘った半世紀 青春も結婚も捨て」(1976年9月28日)など、「救ライ」に尽くした人等に関するもの6本。「“療養の島”に念願の橋 ハンセン病患者の訴え実る 『人間性回復の証明』」(1988年5月9日)など、長島架橋に関するもの3本。皇室等に関するもの2本。「読者から らい病の現状を教えて 減少傾向、年30 - 50人 空気感染、遺伝は迷信」(1985年12月23日)など、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの2本。「ハンセン病-69年の生涯 辛酸の日々 一本の指で」(1981年9月9日)など、理解を求めるもの1本。「アジア救ライ協が活動に幕」(1981年12月27日)など、対外的な「救ライ」活動などに関するもの1本。入所者の文芸作品などを取り上げたもの1本となっている。ここでも、長島架橋に関して、「人間回復の証明」という表現が用いられている。

4)毎日新聞の記事は5本で、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの1本、患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの1本、皇室等に関する者1本、長島架橋に関するもの2本となっている。「ハンセン病ワクチン開発成功 WHO 治療から予防に」(1986年12月9日)、「土曜プリズム 女なんどき 三重苦の同胞を聞き書き4年間 在日朝鮮人主婦・蘇福姫さん」(1987年9月5日)、「悲願半世紀 『人間性回復の橋』 ハンセン病患者ら万感胸に渡り初め」(1988年5月9日)などが目に付く。

5. 1991年から1996年末まで

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

1) この期の記事は、次のような種類に区分することが可能であろう。

医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの

患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの

- 1. 差別・偏見を取り上げたもの

2. ハンセン病、ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの

1. 国内の「救ライ」活動などに関するもの

2. 対外的な「救ライ」活動などに関するもの

光田等、「救ライ」に尽くした人等に関するもの

慰問・寄贈等に関するもの

宗教に関するもの

入所者の文芸作品や音楽会、著書等を取り上げたもの

患者運動に関するもの

社会交流等に関するもの

社会復帰等に関するもの

法改正や法廃止等に関するもの

人権侵害ないし人権擁護等に関するもの

トラブル等に関するもの

その他

2) この期の朝日新聞の記事は79本で、そのうち、報道量が一番多いのは、法改正や法廃止等に関する31本である。

『らい予防法』改正を」(1991年4月18日)、『人間回復を願っているのです』法改正求めるハンセン病患者 今も続く隔離政策 社会防衛思想問う」(6月27日、大阪)、『法律改正求め特別委を設置 ハンセン病患者協』(1992年4月9日、大阪)、『ハンセン病患者の立場から法改正を 15日に金田町で集会』(1994年10月12日、筑豊版)、『すくらんぶる』医療進歩 治る病 『差別生む隔離、廃止を』らい予防法と闘う」(10月19日、筑豊版)、『らい予防法 廃止要求 療養所の所長連盟 『社会復帰へ新法を』』(11月9日)、『福祉保障など要求へ らい予防法改正で患者ら』(1995年1月25日)、『(記者ノート) 差別残すらい予防法廃止を』(2月10日、大阪)、『らい予防法 らい学会が廃止求める 長期黙認を反省 『根拠なく恐怖心あおった』』(4月23日)、『らい学会見解 『画期的な姿勢転換』 全患協会見 新法整備求める意見も』(同日)、『《解説》『法廃止へ流れ決定的に』』(同日)、『社説』 らい予防法をなくしたあとに』(5月10日)、『らい予防法廃止の方向 厚生省 生活維持へ新法』(5月13日)、『文化』 らい予防法廃止求める学会見解 先覚者二人の功績思う 理解と愛情持ち隔離に反対 島比呂志』(5月16日)、『らい予防法』ようやく来年廃止へ 偏見助長した厚生省と学会 薬普及、ほとんど完治 政策転換の好機を逃す 正式に保険診療認める必要 大谷藤郎・藤楓協会理事長に聞く 知ってほしい患者受難の歴史』(5月25日)、『らい予防法』などを

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

話し合うフォーラム 25日、多磨全生園で(6月23日、大阪)「らい予防法見直しを検討」(6月25日)「廃止される『らい予防法』 関連法での差別なお 優生保護法・国民健康保険法」(8月28日)「厚生省素案に患者団体反発 らい予防法見直し」(11月25日)「らい予防法廃止に 通常国会に法案提出へ 厚生省の検討会が報告書 厚相が反省表明へ」(1995年12月19日)「らい予防法廃止へ答申」(1996年1月23日)「らい予防法廃止法案 衆院厚生委で可決」(3月26日、大阪)「らい予防法廃止法成立 『隔離』の根拠に終止符」(3月26日)

しかし、これだけではなく、法廃止が遅れたことについての責任と謝罪、補償などの問題についてもかなりの紙面が当てられている。「《解説》 らい予防法 責任回避図る厚生省 矛盾放置し差別を助長」(1995年12月9日)「国の責任問う声強く らい予防法廃止の報告 偏見克服策も要求」(同日、西部 4段)「国は国会で謝罪を = 高瀬重二郎・全患協会長」(同日)「『コラム私の見方』 らい予防法への反省示せ」(12月19日)「厚相、らい予防法放置を謝罪 患者団体に『苦痛与えた』」(1996年1月18日)「らい予防法放置で謝罪」(2月2日)「ハンセン病患者に『補償と謝罪を』 九州弁護士連が声明」(3月20日、西部)「『予防法放置 行政の怠慢』 全患協が声明」(3月28日)「『らい予防法廃止 遅かった』 菅厚相、療養所で謝罪」(4月14日)「『ハンセン病患者隔離助長』 真宗大谷派が謝罪声明」(4月6日)「らい病の名前をハンセン病に変更 学会名も」(4月26日)「過去のハンセン病隔離 鳥取知事が遺憾の意 岡山の療養所」(8月9日、大阪)など。

のみならず、法廃止後の課題も取り上げられている。「『論壇』 らい予防法の落とし穴 島比呂志」(1996年2月6日)「らい予防法は廃止されたが 大島青松園からの報告 入所者の多くが高齢化 社会復帰への課題山積 国に人権侵害の責任あり = 島比呂志さん」(6月9日、大阪)「ハンセン病施設在園者は訴える 失った時は重すぎるが少しでも交流広げたい なお残る差別と偏見 九州・沖縄の5園 九弁連アンケート」(6月19日、西部)「ハンセン病への偏見なお 手術拒否や『禁足令』 法廃止の意味周知を」(11月26日)など。

強制隔離の歴史を検証する記事も見られる。「『なんでもQ A』 ハンセン病・上 『ゼロへの道』 薬と食生活改善で激減 今も消えない隔離の傷」(1991年7月9日)「同上 ハンセン病・中 『隔離政策』 弱かった人権守る世論 強制収容された例も」(10日)「同上 ハンセン病・下 『根強い偏見』 取り締まり色残す予防法 まず深めたい正しい理解」(11日)などで、そのうえに、「ルポハンセン病『隔離』の88年 『らい予防法』廃止へ 『納骨堂』 死後なお故郷に戻れず」(1995年11月27日)「同上 2 『医療刑務所』 空室続く偏見の遺物」(28日)「同上 3 『学会の沈黙』 生き続けた優生思」(29日)「同上 4 『患者組織』 世界に眼が向かない日本」(30日)などの連載がみられる。

2番目は、理解を求めるもの10本で、上記のルポ「隔離の88年(1)(2)(3)(4)」もこれに含めることができるかもしれない。「『隔離からの解放』 明快に訴え ハンセン病の語り部 伊奈教勝さんを悼む 岡部伊都子」(1996年2月17日、大阪)「ハンセン病差別の歴史を検証 K A B製作ドキュメンタリー 24日午後放映『無知・無関心排し正しい理解を』」(2月20日、熊本版)「ハンセン病の実態映画化 患者の証言記録 東村山の団体など企画」(6月6日、東京)「『ひと』 ハンセン病の心を描く 趙昌源さん」(10月24日)など、入所者自身の肉声を伝えることによって、理解

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

を求めようとしている点が特徴といえよう。

3番目は、「ハンセン病患者の『生の声』が好評 ブックレット『病みすてられた人々』増刷」(1996年9月20日)など、入所者の文芸作品等を取り上げた8本である。4番目は、医学的知見およびハンセン病学会等に関する5本で、5番目は、「『ひと』 全国ハンセン病患者協議会事務局長 神美知宏さん」(1996年10月2日)など、患者運動に関するもの4本と、「人権回復求め実名の訴え 元ハンセン病患者 過去と縁切り仮名で過ごした半生『差別される恐怖 克服して』=森元さん夫妻」(10月2日)など、人権侵害等に関するもの4本とである。

その他は、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの5本、患者・家族等に生じた「悲劇」に関するもの2本、「救ライ」に尽くした人等に関するもの2本、宗教に関するもの2本、社会交流に関するもの2本、国内の「救ライ」活動に関するもの1本となっている。

「人間回復」に加え、「人権」もキーワードとなり始めている。

3) 読売新聞の記事は11本で、その内訳は、法改正等に関するもの7本、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの1本、差別・偏見を取り上げたもの2本、ハンセン病・ハンセン病患者等に対する理解を求めるもの1本となっている。

法廃止等に関するものとしては、「『強制隔離必要なし』 ハンセン病検討会 法廃止へ中間報告」(1995年5月13日)、「らい予防法見直し検討会」(7月4日)、「顔『らい予防法』の見直しを訴える平沢保治さん」(8月10日)、「強制隔離の歴史に幕 『らい予防法』廃止 見直し検討会 国の対応遅れ批判」(12月9日)、「『らい予防法』廃止 隔離の歴史に幕」(1996年3月28日)、「らい予防法の遅れ 厚相、入園者に謝罪」(4月14日)などが認められる。「社説 らい予防法の愚を繰り返すな」(1995年12月14日)に見られるように、明確に法廃止の立場からの報道である。その他、「群馬のハンセン病施設 ゲートボール“偏見の門” 9年間締め出し 県協会に再加盟求める」(1995年11月11日)、「『ハンセン病』描写で日本テレビに抗議」(1996年6月3日)も注目される。

4) 毎日新聞の記事は25本で、その内訳は、法改正等に関するもの15本、理解を求めるもの4本、医学的知見およびハンセン病学会等に関するもの3本、差別・偏見を取り上げたもの1本、社会交流等に関するもの1本、人権侵害等に関するもの1本となっている。

法廃止に関するものとしては、「ハンセン病 『強制隔離は人権侵害』 厚生省委託検討委員長が新法求める」(1994年5月14日)、「『らい学会』も現行法検討 ハンセン病患者隔離 来年4月に公式見解」(5月19日)、「らい予防法廃止を 『差別と偏見生んだ原因』 療養所所長連盟決議」(11月19日)、「ひと・患者代表としてらい予防法廃止に取り組んだ高瀬重二郎さん」(1995年2月5日)、「『らい予防法』らい学会も廃止求める統一見解」(4月24日)、「『らい予防法』廃止を提言 国の対応遅れ批判 厚生省研究会」(5月13日)、「『らい予防法』廃止へ 厚生省検討会が報告書 “終生隔離”政策 89年目」(同日)、「解説・差別黙視の歴史反省を 絶望越え勝ち取った保障」(5月13日)、「多磨全生園ルポ 患者に差別のツケ重く 謝った認識助長し社会的生命奪った今ごろ法律がなくなっても、ここにいるしかない」(12月1日)、「解説『見直しの遅れ』認めたが 厚生省は責任明確化を」(12

月9日)、「ハンセン病患者に厚相が謝罪 『らい予防法』見直し遅れ」(1996年1月18日)、「らい予防法廃止法案答申 厚生省公衆衛生」(1月23日)、「『らい予防法の廃止を考える』九弁連出版 九州の5園アンケート調査ハンセン病差別、在園者330人が告発」(8月27日、西部)、「ハンセン病強制隔離の過去“反省” 鳥取県 県出身患者を『陰・夢博』に招待へ」(12月2日、西部)などが認められる。

これらの記事の流れの中で、「社説・ハンセン病 病める社会が病気を作る」(1995年12月14日)が打ち出されており、「在日韓国・朝鮮ハンセン病患者 里帰りに“偏見の壁” 祖国のホテル『宿泊拒否』」(1992年11月1日、大阪)、「『差別の歴史』と闘い 療養所でハンセン病患者ら 『日の丸の汚点』と言われ」(1994年5月14日)、「偏見の闘い地域から ハンセン病施設の李さん 住民との交流、本に多磨全生園」(1996年2月1日)、「この人と らい予防法、記録に 映画監督・中山節夫さん」(12月16日 19日)が取り上げられている。

七 分析

1. 敗戦から1953年末まで

敗戦から1953年末までの記事に関しては、次のような点が指摘できるように思われる。ハンセン病関係の記事は非常に少ないということが、その第一である。戦後間もない時期には新聞のページ数には極めて少なく、掲載記事の数も限られていた。また、国際的には戦後の冷戦秩序の形成期、国内的には占領から独立への移行期であり、同時に感染症に関していえば、結核、日本脳炎、狂犬病、コレラ、チフスなどの流行に対する懸念が社会的に極めて大きく、ニュースとしてのハンセン病の優先順位は事件的な要素を伴わない限り、高くなかったと推測できる。これはハンセン病が前から存在する病気であり、社会的には「患者の隔離」〔社会からの排除〕という形の対応に多数の人が疑問をもたなかったこと、感染症とはいえ突発的な流行を起こす病気ではないことなどが理由として考えられる。

第二は、数としてはハンセン病患者に対する救済の必要性を指摘する記事の方が多いが、それらはいずれも恩恵・慈善といった観点からのもので、全患者強制隔離収容政策の容認もしくは前提として書かれているということである。全患者収容のための療養所拡張や無らい県運動等に対する差別、偏見を助長するような記事といわば対をなしており、憲法的見地、人権論的な見地は認められない。光田健輔などに対する評価もこれに基づくといえよう。

第三は、ハンセン病に対する差別、偏見を助長するような記事が一部に見受けられることである。それらはいずれも、ハンセン病そのものに関する取材を中心としていない。公安関係の担当記者や事件担当記者などが執筆を担当したのではないかと推測される。ニュースソ - スも警察など、ハンセン病の治療や研究に直接的には当たっていない人物・機関の可能性が高いと思われる。このような場合、いわゆる社会的に流布されているイメージがより増幅、強化されて報道される傾向が強い。治安的観点等が前に出ており、医学的記事等との間で齟齬がきたしている。

なお、病気に関する報道が、特定の病気に関する偏見や差別を生み出したり、助長したりするの

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）

は、a 過剰な報道が不安や恐怖心を増幅させるケース b報道すべきことを十分に報道せず社会に広く流布する誤解を訂正したり、課題の克服を促す契機を提供できずに終わるケースの2つが考えられる。敗戦から1953年末までの報道を現在の基準からみると、後者についてより多くの問題点を抱えていたといえよう。

第四は、患者運動、なかでも予防法闘争に関してである。1953年は周知のように「ライ予防法」の改正案が国会にかけられた年であったが、報道内容はハンセン病患者が陳情や座り込みを行ったことをごく短く報じるにとどまっている。予防法改正に関して何が議論されたのかは記事を見ても分からず、アジェンダ・セッターとしての新聞の機能は果たされていない。また、1952年まではハンセン病が新薬により治る病気であることを強調する記事は掲載されたが、1953年にはそうした記事も姿を消している。もはやニュースではなくなっていた（一応、社会的に認知されていた）ととらえるべきかもしれないが、予防法との関係が問題になろう。

他方、東奥日報の記事であるが、全国紙に比べると、医学的知見に関するものが意外と少ないのに対して、予防法闘争に関するものが多い。ただ、報道内容は全国紙と変わらない。トラブル記事の域を出ない。予防法改正に関して何が議論されたのかは記事を見ても分からない。皇室の「御仁慈」に関するものも多い。入所者の声に関するものが多いことも特徴であるが、「同情」の対象として「美化」するなど、「救ライ」観の枠内にとどまるといえよう。新患者の判明をセンセーショナルに報じたものも見受けられる。

2. 1954年から1960年末まで

この期の朝日新聞の特徴としては、次のような点を指摘することが可能であろう。報道量が増加していることが、その第一である。きっかけとなったのは、「黒髪学事件」報道で、西部本社管内を中心に、患者、反対派住民、行政の対立が詳しく報道されている。前記の予防法闘争の報道とは大きく異なる。しかしながら、このような量的な増加にも増して注目されるのは、質的な変化である。「黒髪校事件」報道等にみられるような「中立的な立場」の採用がそれである。これが第二の特徴である。同じく熊本で発生した「藤本事件」報道は全国ニュース化した。そこでも、このような「中立的な立場」がとられている。

第三は、「救ライ」活動等に関する報道に関してである。前期と同様、恩恵・慈善といった観点が強い。それはハンセン病・ハンセン病患者等に対する「理解」を求める報道においても色濃くみられる。ただ、市民ボランティア的な活動を取り上げた記事も出始めており、変化の兆しとして注目される。上記の「黒髪校事件」報道とも勘案すると、従前の「ライ」観に「揺れ」がみられると評価しえようか。

対外的な「救ライ」活動に関する報道の増加も目につく。これが第四である。戦前の「皇室の御仁慈による八紘一宇のライ対策」の連続線上に位置するものというよりは、文化国家・平和国家として再生した日本が取り組むべき何よりの国際貢献といった側面が大きいといえるが、従前の「救ライ」観に立脚している点が気にかかる。「救ライの父」といった表現も前期同様である。患者の外出を問題視する隔離推進的な記事も減少するが、なお残存している。

従前の「ライ」観の「揺れ」は、「藤本事件」報道における「中立的な立場」、あるいは松丘保養園の二葉分校生徒の修学旅行を取り上げた記事など、産経新聞や東奥日報の記事にも認められる。

3. 1961年から1975年末まで

この期の朝日新聞の記事は、鳥取県による初の「里帰り事業」を報じる1964年11月4日の記事を画期として、2期に小別することが可能であろう。

64年11月までの時期は、前期にみられた「揺れ」がより深まっていると評価しえようか。市民ボランティア的な「救ライ」活動や対外的な「救ライ」活動が前期以上に紙面を飾り、入所者の苦悩を伝える記事も目立ち始める他方で、隔離推進的な記事等も依然として残っているからである。64年5月に光田健輔が死亡しているが、「救ライの父」等として讃える記事がもっぱらで、異なる評価の存在は捨象されている。

熊本地裁判決によれば、遅くとも1960年頃には「らい予防法」は違憲状態に陥っていたと認定されたが、強制隔離と憲法との関係を問うような記事は皆無である。法改正等に関するもの、人権侵害等に関するものなども見出せなかった。予防法が違憲状態になったことについての視点は欠如している。

「ライ」観の「揺れ」が大きく変化し、「理解促進」が基調となるのは、64年11月の「里帰り事業」報道以降である。「里帰り」(=社会復帰)推進論の立場から、事業の内容、推移が、各地から相次ぐ賛辞や他県への拡大等の反響も含めて、詳しく報道されている。隔離推進論からの明確な訣別といえようか。現に、隔離推進的な記事は、1965年8月21日の記事を最後に姿を消している。ただし、「病歴者」「無菌者」といった表現が用いられており、やや及び腰の面が残っている点は気になる。また、市民ボランティア等による「社会復帰施設作り」に対する自治体・住民の反対など、自治体主導の「里帰り事業」の光と影に切り込むような記事も存在しない。

ハンセン病・ハンセン病患者に対する理解を求める記事も、「里帰り事業」報道に次いでいる。この運動には厚生省主導による上からのものと、「厚い壁」上映運動などに象徴される下からのもののが含まれているが、後者の運動も、大阪版を中心に取り上げられている。ただ、前者と拮抗しており、「理解」の意味の見直しにまではいたっていない。入所者の作品等の紹介等を通じて理解を求めようとしているの特徴で、患者運動に関する記事が目立ち始める。憲法論や人権論の観点からのものとは必ずしもいえないものの、「中立的な立場」等から取り上げるようになったこと自体、一定の変化といえよう。

対外的な「救ライ」活動に関する報道のうち、韓国関係の記事の比重が大きいのも特徴である。日韓の友好を意識したものといえよう。沖縄関係の報道も目につく。ただ、新患者報道等にみられるように、理解不足の感は否めない。「救ライ」観もまだまだ根強い。

1965年5月から、従前の「ライ病」「ライ患者」に代えて、「ハンセン氏病」「ハンセン氏病患者」という表記が用いられるようになった点も特筆されよう。完全に表記が切り替わるのは1971年9月からのことであるが、それ以降は、「救ライ」などを除いて、「ライ」という言葉は姿を消す。「ライ菌」も「ハンセン病菌」と表記されている。ちなみに、日本らい学会が、日本ハンセン病学会に名

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任(3)

称変更するのは1996年4月のことである。

ただ、1973年から1978年の間は、報道量が極めて少なくなる。「医師も薬も不足だらけ ハンセン病患者 初めての街頭デモ」(1972年7月)等の記事にもかかわらず、園の貧しい医療・福祉等、そして、それに対する患者作業返還闘争などをはじめとする自治会及び全患協による「経済闘争」についてフォロ - しようといった姿勢はうかがえない。表記の変更等によって、ハンセン病問題はもはや解決済みとの意識が生じたことによるものであろうか。

読売新聞、毎日新聞の記事はそれほど多くない。そこで、1961年から1975年末までを全体として眺めることにすると、両新聞ともに、隔離推進的な記事が姿を消していることが特徴の第一である。ハンセン病・ハンセン病患者に対する理解を求める記事も、数が多くないが、散見される。読売新聞は、「『らい』に正しい理と温かい目を」と題した社説を組んでおり、毎日新聞でも、「厚い壁」上映運動や「偏見解消のための連絡協議会の設置」等が報じられている。「理解」の意味も「偏見解消」に比重が移っている。「窮状訴えるハンセン氏病患者代表」や「平等な医療の道を ハンセン病患者ら 決起」など、患者サイドに立った報道も見られる。「社会復帰意センター」の動きも取り上げられている。社告「韓国へ 救ライ歯科医療奉仕団」などとともに、「救ライの戦死」といった記事も併存している。表記は、「ライ病」等と「ハンセン氏病」等とが併用されてをおり、「ハンセン病」等に統一されるのは1976年以降のことである。予防法の違憲状態や経済闘争に対する態度は朝日新聞のそれと同様である。

4. 1976年から1990年末まで

この期の朝日新聞の記事も、長島架橋着工決定を報じる1984年12月27日の記事を画期として、2期に小別することが可能であろう。

1979年から1984年末までの時期は、「偏見解消」に力点が置かれている。ハンセン病・ハンセン病患者に対する「理解」の内容が、「救ライ」的なそれから「偏見解消」に質的に変化している。これを象徴するのは、『ハンセン病』の軌跡が本に 朝日新聞香川版に連載 差別と偏見打破 患者・家族の側に立って」や「隔離で偏見温存 ハンセン病は解決していない」などの見出しである。

「救ライ一筋に尽くす」、「救ライ半世紀」といった類の記事は残るが、表記が1982年以降、「ハンセン病救済の藤楓協会三十周年」、「ハンセン病患者救済」、「ハンセン病の救済一筋 高島重孝氏死去」などに変わっている。ただ、対外的な「救ライ」活動については、依然として『救ライ』西独に学ぼう」などの表記が用いられている。

長島架橋関係の記事も出始めている。「差別くずす橋」や「隔離の歴史返上」といった観点からのもので、予防法改正関係の記事も患者運動の側に立っている。特筆されるのは「ハンセン病隔離政策に償いを」(1980年9月25日)という見出しが早くもこの時期にみられる点である。

1984年1月15日の『全患協ニュース』は「侍か乞食になるか 予防法論議の出発点」と題した会長の主張を一面に掲載し、再度の予防法闘争の必要性を提起しているが、マスメデイでこれが大きく取り上げられることはなかった。そして、このことが自治会及び全患協が再度の予防法闘争を断念し、その後の予防法改正及び廃止において受動的な」対応を余儀なくされる複線になっていった

ことは重要であろう。

1985年からの時期は、「人間回復」が前面に出てくるのが特徴である。きっかけとなったのは、長島架橋関係の記事で、「愛の架け橋」などの見出しの下に大きく報道されている。「愛の架け橋」等の言葉が多用されているが、内容的には「恩恵」色は消え、ゲート問題では明らかに患者サイドに立っている。路線バスまでフォローされている。それ以降、「人間回復」がハンセン病問題のキーワードとなる。

「患者決起」、「最後の闘い」、「今なお『法で隔離』」などの見出しの下に予防法改正問題を取り上げた記事のほか、憲法の立場から予防法を批判する記事も認められる。「『不惑の憲法』二つの予防法 人権より社会を優先」、「偏見生む『らい予防法』」などがそれであるが、まだ単発的である。

対外的な「救ライ」活動関係では、韓国に対するものが大きな比重を占めており、在日ハンセン病患者の苦難、生活を取り上げた記事も注目される。

1976年から1990年末までの読売新聞、毎日新聞をみると、ハンセン病問題に対する関心は高くない。薄いといってもよい。長島架橋が「人間性回復の橋」や「人間性回復の証明」などという見出しの下で報じられていること、また、「救ライに尽くした人」などの表現が「偏見と闘った人」などの表現に置き換えられていることなどが目に付くくらいである。

5. 1991年から1996年末まで

この期の朝日新聞の記事は、「予防法改正・廃止を促進」と特徴づけることができようか。「ライ予防法改正は当然だ」という社説が1990年11月18日に組まれている。以後も全患協、識者の動きなどを詳しく追っており、1994年頃からは法廃止論を主張している。所長会議や日本らい学会の反省も大きく扱われている。予防法廃止後も残された課題についても、「人間回復求め」や「なお残された差別と偏見」の見出しの下にかなりの紙面が割かれている。「人権侵害の責任」や「補償と謝罪」などの問題についても同様である。入所者の肉声等の伝達による啓発等の姿勢もうかがえる。患者受難の歴史等を検証する大型連載も1991年と1995年の二度にわたって紙面を飾っている。従前の「人間回復」に加え、「人権」もキーワード化している。

読売新聞も、社説「ライ予防法の思考を許すな」を組み、予防法廃止を、「国の対応遅れ批判」など、患者運動の視点から取り上げている。毎日新聞も同様で、「強制隔離は人権侵害」、「差別と偏見を生んだ原因」、「厚生省は責任明確化を」などの視点から予防法廃止を報じ、社説「病んだ社会が病気を作る」のもとに社会の反省を促している。

ただ、「患者運動の立場」に立つということの意味については、掘り下げた検討が行われているわけではない。一定の処遇改善により、1975年以降、自治会運動及び全患協運動に変化が生じているといった視点は皆無である。

八 総括

ハンセン病報道については、「重大ではあるが、長期にわたって継続する現象をどう取り上げてい

くか、「少数の人にとっては極めて重大な影響を及ぼすが、社会の多数の人たちにとってはあまり考えたくない問題をどのようにして多数の人が関心を持ちうるニュースとして伝えていくことができるか」など、現在のマスメディアが未解決のまま抱えている課題に共通する問題が認められる。これを一言で言えば、日常化させられてしまった、あるいは日常化されつつある社会問題をいかに取り上げるかといえよう。報道が結果的に惹起する二次被害についても十分な検討が必要であろう。

ハンセン病に対する社会の差別・偏見を洗淨し、正しい理解を広げるとともに、二次被害を防止し、社会復帰を含む必要な「人間回復」のための「受け皿」作りとそのための支援の輪を紡いでゆくうえで、マスメディアが果たす役割は大きなものがある。この点は改めて詳述するまでもなからう。

ハンセン病報道の検証に際して重要だと思われることは、次のような観点ではないかと思われる。それぞれの時期における報道側の基準というものはどのようなものであったのか。

そして、その基準はその時期のものとして妥当なものであったといえるのか。その時期においては妥当だったけれども、今から見ると妥当でなくなったということなのか。

このような基準に照らしてみた場合、それぞれの時期の報道はどうだったのか。過剰だったのか、不足していたのか。過剰だとした場合、何が過剰だったのか。不足だとした場合、何が不足していたのか。

これらに対する一つの答えは、世論との関係におけるものである。そして、このような角度から見た場合、1965年以降、とりわけ1979年以降のマスメディアは、おおむね世論の半歩先を歩んでいたといえよう。たとえば、1954年から60年末までを見ると、西部本社管内を中心に、中立的な立場から、「黒髪校事件」が詳しく報道されていること。1961年から75年末までを見ると、従前の「らい病」に代えて「ハンセン氏病」という標記がいち早く用いられており、「社会復帰」推進論の立場から「里帰り事業」が詳しく報道されていること。1976年から90年末までを見ると、前期では「偏見解消」に力点を置いた報道が行われており、85年以降の後期では、長島架橋に関連して「人間回復」が前面に押し出されていること。1991年から96年までを見ると、「予防法改正・廃止」を促進する立場からの報道が行われていること。これらはその一例ともいべきものである。その先見性を評価しえないこともない。

しかしながら、自治会及び全患協がマスメディアに望んだ報道という角度から眺めると、風景は異なってくる。予防法闘争や、その後の作業返還闘争等を初めとする園の貧しい医療・福祉等の改善闘争、そして、幻に終わった再度の予防法闘争、等々。これらはいずれも、マスメディアが大きく取り上げることによって、社会的支持が広がることを自治会及び全患協が期待した事項であった。そのこともあって、自治会及び全患協は機関誌等をマスメディアに送り続けた。だが、この切なる願いは、「絶やすまい世間との“パイプ” 39年間続くハンセン病患者の機関誌 編集を一人で守る 星塚敬愛園 患者減り原稿に悩み」(1974年4月26日、朝日鹿児島版)の記事などにもかかわらず、「片思い」に終わることになった。いわゆる全国紙と呼ばれ、紙面の面積が比較的多い媒体でも、他に報じなければならぬ出来事があるという編集上の判断に基づく優先順位に押されて、

ハンセン病に関する記事は報道の「隅っこ」に追いやられていた。そして、それは再度の予防法闘争を幻に終わらせる大きな要因の一つとなっていった（詳しくは、別項の「全患協運動について」を参照）。自治会及び全患協が願ったのは1984年以前の報道についてであったが、マスメディアがその立場に立ったと自負する「患者運動」というのは、皮肉にも、社会的支持の広がりや欠く中、国の「強制隔離と処遇は表裏一体」論の大きな影響を受けることになった、いわば変化を余儀なくされた「患者運動」であった。

問題は、このような大きな「すれ違い」がどうして生じてしまったのかということである。日常化された「異常性」に気づくことは容易ではない。まして、国策としての強制隔離政策が戦前からずっと採用され続けてきたことからすれば、人々がこれに気づかなかつたとしてもやむをえない面があるかもしれない。しかし、アジェンダ・セッティング機能を発揮することが強く期待されるマスメディアの場合、社会的な課題に対してはより高度な関心を維持することが求められている。社会で虐げられている人々が感じている、苦しみや痛みは、やがて社会全体に蔓延し、より多くの人々に窮屈さや殺伐とした空気をもたらしていく。日常的、恒常的に、あたかも皮膚感覚で進行する差別や偏見の感情こそが、のちに大きな被害を生む。このことを、きちんと認識しなければならない。

こうした観点からすれば、全国の歴代の新聞記者の多くはハンセン病問題に不勉強であった。ハンセン病療養所に足を踏み入れることもなかった。取材が認められる体制も弱かった。療養所に足繁く通う記者も僅かながらいたが、その問題意識が全国的、全社的に共有されることもなかった。記者が療養所に足を踏み入れることがあまりにも少なく、報道機関の総体としても、ハンセン病に関して長い間、現場での取材を踏まえた報道の体制をとる意欲に欠けていたのは何故か。この点はマスメディアの取材と報道の本質にかかわる課題として指摘しておく必要がある。

現代社会において、発生する問題の多くは、報じられることによって社会に認知され、それが政策決定者の意思決定にも大きな影響を与えることになる。報道者が気づかぬということは、社会的に問題を抹殺したのも同然である。問題や被害がそこにあるのに、報じられない現実。あるのにないとされている怖さ。気づかないことによって生じる重大な社会的過失。報道の現場にいと、突発的なことや奇異に映ることに目を奪われがちで、日々の紙面づくりに追われて、日常生活の陰にひっそりと潜んでいる問題を発掘する作業は後手後手になりがちになることもある。もちろん、それを克服した報道事例も少なくはないが、それでもなおこの点は、多くの報道機関において現在も解決すべき課題となっている。「報道されるべき事が報道されない」ことの危うさ、そのことが結果としてもたらす重大な被害を認識しつつも、個別のケースを取り上げていけば、すべてに対応できているとはいえない状態である。

マスメディアの記者に要請されてきたニュース判断というものが、その時々マスとしての読者の求める情報にあまりにも身を寄せすぎる傾向があることも克服すべき課題となっている。それが結局は、少数ではあるが、掬い上げる必要度の高いは問題の当事者からの声に耳を傾けることを妨げ、取材の原点ともいべき現場の存在を見失う結果を長期にわたってもたらすことがしばしばあったからだ。他社見合いの横並び取材が、その時々ニュースとされてきたものに集中的に報道資源を投入し、取材競争を展開しがちなマスメディアの性向とあいまって、このような欠落に拍車を

かけた面もある。また、無意識にせよ記者および編集者の心の中に住み着いてしまった差別・偏見の存在がハンセン病患者、元患者に対する継続的かつ重大な人権の侵害をニュースとして取り上げることに消極的姿勢をとる大きな要因となったことも否定できない。社会の大多数によって共有される感覚を内在化することは、不特定多数の対象に情報を伝えることを職務の大きな柱とするマスメディアにとって、ある意味では必要とされることではあるが、それが同時に少数者の存在に対する想像力を失わせる危険をはらんでいることは、報道に携わるものが常に自覚しておかなければならない余りにも苦い教訓である。このような指摘もなされている。

ほとんどの記者は療養所に通う機会を放棄し、「隠蔽された人権侵害」の救済に無力であった。記者が療養所に足を踏み入れなかったことなどは、事業部だけでなく社会部など第一線の取材記者も一緒に取り組んだアジア救済事業の報道にも如実に現れている。社会的弱者の存在にもっとも敏感であるはずの社会部記者らが、なぜ、国内の療養所には目もくれずに、インドをはじめとするアジアの国々のそれに肩入れしていったのか。これには、「国内のライ病問題はすでに解決した」という宮崎松記等の主張を鵜呑みにしてしまったことが大きかったと思われる。だが、かりに記者が療養所に足を運び、入所者の声に耳を傾けたとすれば、このような主張が誤りであることに直ちに気づくことができたからである。

ハンセン病報道の過ちは、決して偶発的なそれではない。日本の戦後のマスメディアが構造的に抱えている、そして、いまだ克服しえていない問題に起因しているといえよう。たとえば、次のような問題がそれである。

1. 現場の記者をめぐる問題点

記者自身の視点に固定化、取材対象の視点への同化等が見られること

時間的制約があること

一線記者に専門的知識が欠如していること

2. 新聞社の組織としての問題点

突発・特異な出来事など、話題性のあるものや一過性の出来事を大きく取り扱う傾向にあり、このために日常の中に潜んでいる問題点や恒常的な被害が取り上げられず、結果として被害を拡大させてしまうこと

マイナーに見えることにこだわる記者がいた場合に、往々にして「異端視」されがちで、その取材が認められる体制が弱いという面があること

問題に気づいた記者が頑張った場合にも、往々にしてその問題意識の意味が全社的、全国的に共有されるにいたらず、単発で終わってしまうという面があること

時間的制約がある中でより効率的な取材を求めるため、情報が集約される公的機関（警察など）に情報源を求めがちで、このためにマイノリティー・弱者からの視点からの記事が書きにくいという面があること

特に医学的・法学的な問題では、専門家の持つ情報量と蓄積に対抗して、「素人」である記者らが批判キャンペーンをするためには、相当の準備が必要となるが、その体制が弱いために、社

会的評価が固まっていない主張をとりあげることが少なく、国やこれまでの通説をなぞる形となり、問題点を指摘する踏み込んだ報道にならないこと

このため、何か事件性があったり、人々の興味関心をひきつける出来事があれば、これまでの価値観を百八十度転換する可能性（ときに解決に向かう可能性）がある一方で、そのような突発性などがない場合に、長期間にわたって、差別や偏見を放置し、その結果、助長してしまうという事態をもたらしてしまうということ

九 再発防止策

1. 記者個人に求めるべきこと

専門的知識を身につけること

何がフェア - であるか、常に自分の取材活動を通じて問い直し続けること

世間の常識や国の政策について安易に現状を追認せず、懐疑的な目で正邪を問い直す姿勢を貫くこと

少数者の声に耳を傾け、その声を社会に伝えるために努力と工夫を怠らぬこと

現場観を再構築すること（現場とはなにか、現場はどこにあるのかといったことをもう一回、考えて情報が出る場所を広げていくといった作業を行うこと）

自らの報道を常に検証すること

2. マスメディアに求めるべきこと

記者研修制度の一層の整備・充実化を図ること

抜本的な取材体制の見直しを行い、視点が取材対象と同一化しないようにすること

末端の記者の活動や地域面の記事にも気を配り、紙面審査・記事審査などのセクションに、全社を挙げて取り組み、社会に訴えるべき問題が水面下で眠っていないかどうか、不作為の掘り起こしにも力を入れさせる仕組みを作ること

読者からの社会が内包している問題についての取材の要請、問題点の指摘などを受け付ける「公聴」セクションを開設し、その内容と対応の結果を定期的に公表すること

マスメディアの伝える情報と学会専門誌の伝える情報との間の空白地域を埋めるための方策を講じること（感染症対策に関しては、専門家の間でも、ちょっと守備範囲を外れると、意外に海外情報に疎いのではないか。広く一般に伝えるべき情報と専門家が専門分野で入手している情報との間のいわば、隙間にある情報が伝わるような工夫がインターネットなどを使って可能なのではないか。このシステムが、情報の市場原理からするとうまく成立しないようであれば、公共財的な情報伝達回路をメディアが関与した NPO の活用のような形で考えることができるのではないか。たとえば、学会の権威者が隔離が必要だと強く主張すれば、変だなと思う人がいても、その専門分野では干されてしまうので逆らえない、といったことは、そうした学会共同体の外側に海外からの情報を供給する仕組みがあるだけで、結構、防げるのではないか。）

第十四 ハンセン病強制隔離政策に果たした各界の役割と責任（3）